

家康公御文章（いえやすこうごぶんしょう）

〔異称〕 書名は外題による。首題「神君より秀忠公御台様え被進候御書之写」。一般に「東照宮御消息」と呼ばれ、他に「駿河状」「御教訓」とも。

〔書型〕 大本一冊。天地二七五ミ。

〔作者〕 伝徳川家康作。作者は江戸時代前期の将軍で、天文十一年（一五四二）十二月二十六日生、元和二年（一六一六）四月一七日没。七五歳。本姓、源。松平氏。名、初め元信・元康、のち家康。通称、次郎三郎・内府・大御所。大神君・前大樹公と称す。諡号、東照大権現。江戸幕府初代将軍。三河生れ。近隣諸大名の覇権争いや天下統一へのめまぐるしい動きのなかで成長した。慶長八年（一六〇三）征夷大将军となり、江戸に幕府を開設、正式に全国を統治するに至る。同一〇年、将軍職を子秀忠に譲るが、その後も駿府にあって行政手腕をふるった。元和元年、「武家諸法度」「禁中并公家諸法度」を制定。古籍籍や古記録の蒐集、伏見版・駿河版の刊行など、文運を高めた。＊以下、作者詳細は、多く『国書人名辞典』（岩波書店）に拠った。

〔年代〕 元和二年頃作。天保三年（一八三二）六月、山本某書。

〔内容〕 家康から秀忠の妻（崇源院）に宛てた一通の消息文の形式で、武士たる者の心得や武士子弟の教育について説いた教訓書。秀忠の次男（国松）をいかに教育すべきかを述べた一種の教育論で、手習い手本としても使用された。育児については、長男信康の教育の失敗から、幼時の教育（特に厳格な教育）の重要性を繰り返し述べ、我が俣を戒め堪忍を徹底的に教えよと説き、家臣に対する慈悲や異見の仕方など為政者の心得にも触れる。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『日本教育文庫・女訓篇』、『女訓叢書』四輯「育英論文」、『子育ての書』一（抄録）。【影印】なし。

悔草（くやみぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。首題・柱題ともに同じ。改題本に延宝八年（一六八〇）刊『自己問答』がある。

〔書型〕 大本三卷三冊。天地二七七ミ。

〔作者〕 井上小左衛門作。浅井了意によれば作者は井上小左衛門尉とされ、この人物は元和元年（一六一五）五月六日、道明寺で討ち死にした井上小左衛門尉定利というが未詳（著者の考察は『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇』を参照）。

〔年代〕 正保四年（一六四七）七月刊。「京都」吉野屋板。

〔内容〕 序文に「…姥、おうぢの世語を愚のまゝに書つゞり、己が後悔を顕すはふつゝかなれど、拙き我子のため、下臈の世渡るたづきともならん物なら、なきにはしかじ『くやみ草』をや」と記すように、自らの人生を振り返りつつ綴った教訓で、上巻「親の子をいつくしみ思ふ事」以下四一項、中巻「子のおほきをうたてしと云事」以下三七項、下巻「まづしきは心のひがむ事」以下三七項を収録する。うち育児に関する記述が上巻冒頭部のほか各巻に散見される。例えば、上巻「ちごのころみある事」では、初誕生に「男子には弓筆、女子には糸針などもてあそびの品々入ませて、児の心まかせにとらせ」てその子の才能や適性を占う中国の「周歳拿周」に触れ、上巻「いとけなき時をしへの事」以降で八歳以後の年代別教育論を展開し、特に一六く二〇歳を最も重要な時期（人の瀬越）と説く。また、中巻「子のおほきをうたてしと云事」では、「子宝」とはいえ子供が多すぎるのも少なすぎるのも良くないと述べ、適切な子供の数について触れている。

〔備考〕 全冊を収録。なお、底本は刊行者不明のため、別本吉野屋板の刊記を補った。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇』（天理図書館司書研究部編）。【影印】『江戸時代女性文庫』八巻。

鑑草（かがみぐさ）

〔異称〕書名は外題による。首題・柱題ともに同じ。
〔書型〕大本六卷合三冊（改装）。天地二七五^ミ。

〔作者〕中江藤樹作。作者は江戸時代前期の漢学者で、慶長一三年（一六〇八）三月七日生、慶安元年（一六四八）八月二五日没。四一歳。名、原。字、惟命。通称、与右衛門。号、嘿軒（黙軒）・頤軒・藤樹・一白・不能叟。近江聖人と称される。日本陽明学の祖。近江高島郡小川村の農家に生れ、元和二年（一六一六）伯耆米子藩士の祖父の養子となる。同三年、藩主加藤貞泰の転封により伊予大洲に移る。同八年、祖父の死により家督を相続、百石取、風早郡役人となる。寛永一一年（一六三四）脱藩して近江に帰り、以後、学問に励んだ。諸国から従学する者が多く、門下に熊沢蕃山がある。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕正保四年（一六四七）八月刊。「京都」風月宗知板。

〔内容〕説話の大半を明の顔茂猷編『迪吉録』に取材し、また、李氏朝鮮世宗一四年（一四三二）刊『三綱行実図』や『劉向列女伝』等からの説話を引きながら、因果応報の道理を平易に論じた仮名書きの女訓書。幸福の源泉を「明德・仏性」に求め、この「明德・仏性」の修業の鑑として、巻一「孝逆之報」、巻二「守節背夫報」、巻三「不嫉妬毒報」、巻四「教子報」、巻五「慈残報・仁虐報」、巻六「淑睦報・廉貪報」の八報について述べる。孝行と不孝の因果論や舅姑への孝、夫への貞節、嫉妬の戒め、明德・仏性教育、継子への愛、下僕への憐愍、姑・小姑との和睦などについて儒仏両面から平易に説く。本書を抄訳した元禄七年（一六九四）刊『女教訓文章』、享保一四年（一七二九）刊『女家訓』およびその改題本の安永一〇年（一七八一）刊『本心近道真一文字』など本書の影響下に生まれた往来物も多い。

〔備考〕第四巻の全部と各冊の一部を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵（底本は江戸時代中期の俳人・名古屋藩士、横井也有旧蔵書）。

〔文獻〕【翻刻】『藤樹先生全集』三巻、『婦人文庫』一卷「教訓」（婦人文庫刊行会編）、『子育ての書』一（抄録）。【影印】『往来物大系』八二巻、『往来物分類集成』R三八、『往来物分類集成Ⅱ』R二、『家政学文献集成・続編』江戸期V。

初学文宗（しょがくぶんそう）

〔異称〕書名は外題による。首題・尾題ともに同じ。
〔書型〕半紙本一冊。天地二四二^ミ。

〔作者〕徳川義直作。作者は江戸時代前期の大名で、慶長五年（一六〇〇）十一月二八日生、慶安三年（一六五〇）五月七日没。五一歳。本姓、源。松平氏。名、初め義知・義利・義俊、のち義直。字、子敬。諡号、敬公・武衛公。徳川家康の九男。尾張藩初代藩主。大阪城西丸に生れる。慶長八年、甲斐府中藩主、同一二年、尾張清洲に転封。その後も所領を拡大し、尾張・美濃・三河・信濃・近江・摂津にまたがる六一万九五〇〇石を治める。草創期の藩政を推進する一方、儒学・神道・軍学・音楽にも関心を持つ。蔵書家としても知られ、また亡命中の明人陳元賛らを保護した。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕慶安三年作。延宝四年（一六七六）五月、成田宜長書。延宝七年四月、并河主静跋。明和六年（一七六九）一月、白木興常書。

〔内容〕現存諸本により異同が少なくないが、底本によれば、「学ノ事ハ難キニアラズ。人生ノ日々ニ用ヒ行フ処、是皆学ノ道ナリ」として学問が万人必須と論し、「人初テ生レシヨリ七十以上マデノ間、心ヲ正シ身ヲ修メ、国家ヲ治メ、其外、官職・礼法・郡旅・葬（祭）ニ至マデ仮名ヲ以テ是ヲ書付ケ」た教訓書。冒頭に胎教から七〇歳までの随年教法あるいは生涯指針の大要を説く。短文ながら為政者の撰作であり、近世初期の年代別教育論として注目される。続いて、「孝行之事」「身ヲ修ムル事」「軍之事」「国ヲ治ル事」「礼法之事」「官位之事」「神社之事」「葬之事、附祭之事」「惑之事」の九章について簡潔明瞭に記す。育児書としても本書は異彩を放つ存在だったが一般にはほとんど流布せず、また、現存写本も極めて限られ、後の育児書への影響も見られなかった。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文獻〕【翻刻】『名古屋叢書』一卷「文教編」、『尾張家言集』（尾張徳川黎明会編）。【影印】なし。

蔵笥百首（ぞうしひやくしゅ）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題ともに同じ。

〔書型〕大本六卷三冊。天地二六七^ミ。

〔作者〕藤井懶斎作。作者は江戸時代前期の漢学者・医者で、元和四年（一六一八）生、宝永二年（一七〇五）七月一二日没。八八歳。一説に、寛永五年（一六二八）生、また、宝永六年七月一二日没とも。修姓、膝。名、臧・玄逸。字、季廉。号、懶斎・蘭斎・伊蒿子・よもぎが杣人。初め真部（真辺・真名部・真鍋とも）仲庵（忠庵）と称す。讃岐高松真行寺住職了現の男。医学を岡本玄治に、儒学を山崎闇斎に学ぶ。筑後久留米藩に招聘され、真部仲庵と称して藩医を勤める傍ら、儒学・国学・和歌を講じた。^{*}『国書人名辞典』参照

〔年代〕万治二年（一六五九）頃作。延宝六年一月初刊（『京都』村上勘兵衛板）、元文元年（一七三六）九月再刊。〔大阪〕大野木市兵衛ほか板。

〔内容〕『百人一首』から一二首、『八代集』から八八首の合計一〇〇首を選び、「その歌の本説にかゝはらず、ひたすら婦道のうへにとりこなし、ことばをいやしくして注」を加えた女訓書ならびに異種百人一首。主に児女の教訓となる和歌を集めて、訓話的解説と挿絵を交えたのが特徴で、その解説も教訓に重点が置かれ、例えば第三九首解説は六丁半に及ぶ長文で婦女子の学問の大意・心得を綴る。また、同解説文中に、「此ごろ『女四書』『大和小学』『列女伝（仮名列女伝）』『鏡（鑑）草』などいふ物、ひらがなにかきて世にもてあそべり…」の記述があることから撰作年代は万治年間と推定される。育児については、嫁ぐまでの短い年月でしっかりと教育すべきことや『小学』に基づく年代別教育論、婦人の四徳や夫婦関係の心得、また、女性が外事に関与しないことや誠の涵養、一四、五歳までの習わしの重要性などを説く。

〔備考〕上巻序文および第一七首、中巻第三九首、下巻第九八〜一〇〇首および刊記を収録。なお底本の刊記は『女源氏教訓鑑』の刊記の流用であり、この跋文は『蔵笥百首』と無関係である。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕なし。〔影印〕『江戸時代女性文庫』六七巻。

比売鑑「述言編」（ひめかがみ）

〔異称〕書名は第一巻の首題・序題による。題簽題および柱題「姫鑑」。異称「ひめかゝ見」「日売鑑」「秘女鑑」「婦通鑑論草」。

〔書型〕半紙本一二巻一二冊（述言編）。天地二二八^ミ。

〔作者〕中村惕斎作。作者は江戸時代前期の漢学者で、寛永六年（一六二九）二月九日生、元禄一五年（一七〇二）七月二六日没。七四歳。仲邨とも。名、之欽。字、敬甫。通称、阿七・七次・七左衛門・仲二郎。号、惕斎。京都の呉服商に生れる。朱子学を独修し、天文地理や尺度量衡にも精通し、音律にも詳しくかった。殊に礼を重んじ性理学を奉じ、伊藤仁斎と並び称された。天和三年（一六八三）伏見京町に隠居し著述に専念。『訓蒙図彙』の編者として著名で、藤井懶斎・米川操軒らと親交があった。^{*}『国書人名辞典』参照

〔年代〕寛文元年（一六六一）十一月、伏見江閑人序。貞享四年（一六八七）十一月、伊蒿子序。宝永六年（一七〇九）一月刊、江戸中期後印。〔江戸〕須原屋茂兵衛板。

〔内容〕序文に『小学』こそ「しりやすく、行ひやすきよすがあれば、男女をわかずおさなきよりの手ならひぐさ、これぞうへなき物なり」と述べ、『小学』の教えを敷衍した女訓書。述言編一二巻は「言」を述べ、後編一九巻には「行い」について論じ、いずれも『小学』の柱である「立教・明倫・敬身のおもむきによりて、その内を書」き分けたもの。巻之一は「立教」による子育て、巻之二く六は「明倫」の父子・夫婦・長幼・君臣・朋友の人倫、巻之七く一二は「敬身」すなわち学問による修身、また神道・仏教等について述べる。ちなみに、これに続く紀行編一九巻は、述言編の教えを和漢の多くの事例（人物伝）によつて例証したものである。育児については、第一巻で『小学』の年代別教育論等を詳述する。

〔備考〕述言編一二巻のうちの冒頭（第一巻）と刊記を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕『婦人文庫・伝記』（婦人文庫刊行会編）、『婦人文庫・姫かゝ美』（朝野昇編＊抄録）、『子育ての書』（抄録）。〔影印〕『江戸時代女性文庫』七一一七四巻、『往来物分類集成Ⅱ』R四。

大学或問（だいがくわくもん）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題・見返題・尾題等全て同じ。

〔書型〕大本二巻二冊。天地二六七^ミ。

〔作者〕熊沢蕃山作。作者は江戸時代前期の漢学者で、元和五年（一六一九）生、元禄四年（一六九一）八月一七日没。七三歳。初め野尻氏。名、伯継。字、了介・了海・良介。通称、左七郎・次郎八・助右衛門。号、蕃山・息遊（游）。軒・不敢散人・不盈散人・有終庵主。蕃山了介と称す。野尻一利の長男。外祖父水戸藩士熊沢守久の養子。京都生れ。岡山藩主池田光政に仕え、寛永一五年（一六三八）致仕。中江藤樹の門にあり、のち岡山藩に復仕して番頭を勤め藩政に貢献。三九歳で光政の三男政倫を養嗣子にして隠退、京都に上つて公卿・文人と交わつた。これが幕府の疑いを招いたため京都を去り、明石藩主松平信之に迎えられたが、その転封に伴い大和郡山・下総古河と移り住んだ。時務策の建言が幕府の禁忌に触れ、禁固を命ぜられ、古河で没した。陽明学を基本として時処位の至善を実践することを主張した蕃山学を唱えた。^{*}『国書人名辞典』参照

〔年代〕貞享四年（一六八七）八月以前作。天明八年（一七八七）四月、随心王府芝竜序。同年十一月刊。「京都」

小野御殿（凌霄閣）蔵板。「大阪」泉本八兵衛ほか売出。

〔内容〕本書は蕃山が古河城中への幽閉を招くことになった問題の書で、蕃山死去後の天明八年に刊行された際も発禁処分となった（後に再刊）。参勤交代や鎖国など幕府政策の根幹に触れる内容を多く含む経世済民論で、上巻が「人君天職之事」以下一〇章、下巻が「上の御冥加損益之事」以下二章の合計二二章からなる。このうち下巻第十九章「学校の政之事」以下に彼の教育論が見られる。まず、学校は「人道を教える所」であり、学校の長には「徳ありて理にくらからざる人」を登用し、その下に「博文達才の者」を置いて経伝を教授すべきと説き、続いて、八歳から三〇歳までの武家の子弟教育（習字・素読・礼法・音楽・弓馬・数学・芸能）のあり方を述べる。

上巻の一部と下巻第十九章以下などを収録した。

〔備考〕小泉吉永蔵。

〔文献〕『日本思想大系』三〇巻「熊沢蕃山」、『蕃山全集』三巻ほか。【影印】なし。

婦人養草（ふじんやしなぐさ）

〔異称〕書名は首題・序題による。第一巻題簽題「やしなひ草」。目録題・尾題・跋題「和漢婦人養草」。

〔書型〕大本五巻五冊。天地二六二^ミ。

〔作者〕村上武右衛門作・序。作者は江戸時代前期の武士で、加賀藩士（三〇〇石）。生年不明、元禄四年（一六九一）没。号、梅塢散人・逝水。

〔年代〕貞享三年（一六八六）冬自序。元禄二年（一六八九）五月刊。「大阪」安井弥兵衛板。

〔内容〕諸書から女子一生の教訓・教養となるべき事柄を抽出した全五巻二二八項に及ぶ女性教養書。引用した和漢書が極めて多く、第一巻「援引和漢之書目」には『日本紀』『続日本紀』『延喜式』『本朝文粹』『古今和歌集』『源氏物語』など一二九の書名を連ねる。第一巻は「胎内の子に道をおしゆる法ある事」以下四〇項、第二巻は「白拍子のはじまり并大江玉渚がむすめの事」以下四三項、第三巻は「むかし名譽の相人ありし事」以下五四項、第四巻は「鴛の刃羽のいわれの事」以下三三項、第五巻は「とぼり帳の事」以下五八項を収録する（合計二二八項）。巻毎の明快な分類意識はなく、人物略伝や種々故実を中心に、異名・語源・生活用語・言葉遣いなど語彙関連の記事や婚礼・産育・化粧・衣装・風俗・和歌・諸芸・養生・諸道具・年中行事等についての諸知識や諸心得を無秩序に列挙する。育児については、第一巻冒頭部で胎教について説き、孟母三遷・孟母断機のお話を引いて母親の教育の重要性を論ず。

〔備考〕第一巻第一〜四章を抄録。なお、元禄一〇年（一六九七）刊『女万用集』には本書からの引用や模倣が多く見られる。また、寛政一三年（一八〇一）に藤井懶斎作に改竄した改題本『女万宝操鑑』が刊行されたが、同書は元禄板の第二巻末尾七項、第三巻末尾一二項、第四巻末尾五項の合計二四項を削除し、五巻を一冊に合綴して全項目を通し番号に改め、巻頭に色刷り口絵、目録上欄に女性諸芸等に関する記事や挿絵を増補したものである。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕『翻刻』『往来物大系』八九巻、『江戸時代女性文庫』五〇巻、『往来物分類集成Ⅱ』R五、『家政学文献集成・続編』江戸期Ⅳ。【影印】『やしなひ草』（吉本直嗣編）。

いなぐさ草（いなぐさ）

〔異称〕書名は下巻原題簽による。見返題「蠡斯草」。柱題「蠡草」。

〔書型〕半紙本二巻合一冊。天地二二三ミ。

〔作者〕稻生恒軒作。稻生若水（宣義）・伊蒿埜丈序。作者は江戸時代前期の医者・漢学者で、慶長一五年（一六〇〇）一〇月生、延宝八年（一六八〇）一月二六日没。七一歳。名、正治・屈頭。字、謙甫・見茂。号、恒軒。子は本草学者・漢学者の若水。大阪の人。山城淀藩永井右近太夫尚征の儒医。古林見宜に医を学ぶ。主家の除封により、のち丹後宮津侯に仕え、晩年に大阪に帰った。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕元禄三年（一六九〇）春、伊蒿埜丈序。同年刊。「京都」桃華堂板。なお、刊記に「西村孫右衛門開板」と明記するものが初版本と考えられるが、桃華堂と同一書肆か。

〔内容〕伊蒿埜丈の序文にあるように、婦女子が心得ておくべき胎産の道を「かんなにかきて女子のよくよむべきやうに」綴った画期的な産育書。一「胎教」、二「保養」、三「臨産」、四「産後」、五「治療」、六「祈祷」、七「通論」の七章に分け、あくまでも女性を読んで理解できるように卑近・平易を旨とする。冒頭で「人の子は胎内にありては母と一気なり。母の心のさまを子の心にうつし、母の身のはたらきを子の身にうつす」として、妊婦の心の状態が胎児に直接的な影響を及ぼすことや胎教の重要性を説き、さらに『小学』に基づいて行住坐臥の具体的な注意を促す一方で、妊婦が読むべき書として『大和小学』や『鑑草』を推奨するなど独自の心得も説く。また、妊婦の保養面では心・身体活動・食事のバランスの大切さを論ずるとともに、貴人に難産が多い四つの理由も掲げる。以下、産前後の心得や婦人病の治療や祈祷にも触れ、特に祈祷・呪い・占いなどを盲目的に信じる弊害を指摘し、最後の「通論」で、妊婦の心掛けの大切さや病氣への対応、また食養生や大欲等について述べている。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕『日本教育文庫・衛生篇』、『日本産科叢書』、『子育ての書』一。【影印】『江戸時代女性文庫』八巻。

唐錦（からにしき）

〔異称〕書名は序題・目録題による。外題は『唐にしき』『からにしき』『可羅錦』とも。

〔書型〕大本一三巻一三冊。天地二六一ミ。

〔作者〕成瀬（大高坂）維佐子作。作者は江戸時代前期の女流著述家で、万治三年（一六六〇）十一月七日生、元禄一二年（一六九九）九月一七日没。四〇歳。名、いち。字、維佐（伊佐）・維佐子。号、喬松子。阿波の人成瀬忠重の女。漢学者の大高坂芝山の妻。江戸で生まれ、幼少より和漢の学を修め、信仰に篤かった。貞享二年（一六八五）夫芝山が伊予松山藩に仕えると、藩主の室に奉公し、女訓書を著した。

〔年代〕元禄七年（一六九四）四月、大高坂芝山（一峯）跋。寛政一二年（一八〇〇）四月、大高坂延年序。享和三年（一八〇三）九月書。

〔内容〕大高坂芝山の妻である維佐子が著した膨大かつ体系的な女訓書。「女則」五巻（第一〜五巻）、「装束抄」一巻（第六巻）、「姿見」一巻（第七巻）、「写絵」一巻（第八巻）、「古教訓」一巻（第九巻）、「柳桜集」四巻（第一〇〜一三巻）の六部一三巻から成る。「女則」では、「をんなの学ひの法」を学範・卑弱（春巻）、婚礼・孝行（夏巻）、貞烈（中央巻）、内治・胎養（秋巻）、母道・婦功（冬巻）の九章に分けて述べ、「装束抄」では婚礼時服や四季衣装、その他衣衾飾り等の故実、「姿見」では中国の賢妃、「写絵」では本朝近世の貞女についてそれぞれ説く。また、「古教訓」では「女則」で展開した「学びの道」を補足的に述べ、最後の「柳桜集」で以上五部の拾遺や文学論を問答形式で綴る。このように、女性の教養全般にわたるが、「まなびこそ、げにかぎりなきたのしみならめ」という言葉に象徴されるように、本書の内核は「女則」である。延年の序文によれば、稲葉正通の求めにに応じて本書をわずか三カ月で著し提出したが、その副本が長く秘蔵されており、それを荘内の医師・前田子仁が発見し上梓する運びとなった。育児については、第四巻の「胎養 第七」と第五巻の「母道 第八」に詳述する。

〔備考〕第一・四・五・一三巻の一部を収録。刊本は寛政一二年序・刊で、本書はその写し。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕『日本教育文庫・女訓篇』、『子育ての書』一。【影印】『江戸時代女性文庫』三七・三八巻。

壺の石文（つぼのいしぶみ）

〔異称〕 書名は一般名称で、四・九・一二巻の外題による。他巻の外題は『つぼのいしぶみ』『津保農以志文』『津穂の石婦美』『つぼのゐし文』など。

〔書型〕 半紙本八編一三卷一三冊。天地二二七^ミ。

〔作者〕 作者不明（中野節子氏によれば、熊沢左内継長作か。詳細は『江戸時代女性文庫』三六巻解題参照）。

〔年代〕 元禄一年（一六九八）二月刊。「江戸」松会三四郎板。

〔内容〕 「帰雁の文」三卷、「介婦の訓」一卷、「慈母嘉言」二卷、「嬖方の帖」一卷、「賢女・貞女の判」一卷、「貞女・烈女の判」二卷、「似せものの判」一卷、「或人のたづね」二巻の合計一三巻から成る女訓書。「帰雁の文」は阿仏尼作『乳母の文（庭の訓）』を敷衍した教訓で、女子教育や女子の教養・心得などを論ず。「介婦の訓」は、日常生活上の起居進退・所作・身だしなみに関する教訓。「慈母嘉言」は、嘉言・善行とその心延えに関する教訓。「嬖方の帖」は、婚礼・養育・五節句等の道具・玩具・飾り物についての故実・作法。「賢女・貞女の判」は、『源氏物語』中の女性を賢女・貞女の観点から論じたもの。「貞女・烈女の判」は、「一、袈裟御前の事」以下六章、また、「似せものの判」は「一、愚夫の妻、貞道心得ちがへの事」以下二章で、いずれも歴史上の女性数人をあげて貞烈、是非の別を述べたもの。「或人のたづね」は、上記の内容に對する批判・反論等について弁明したもの。以上の教訓内容のほか、凡例には各巻の読み方について「帰雁の文三帖は、やはらかに、やさしく読むべきなり」などと述べたり、「御」の五つの読み分けや男文字・女文字に着目するなど、同時代の他の女訓書と比べて際立った独自性が少なくない。育児については、第一巻「帰雁の文」で女性の読み書き、読むべき書物や教養、また、父母の育児役割を、また、第一二・一三巻の「或人のたづね」で、学問の目的と女性の学問の範囲、男女の文字や言葉遣いの違い、女性も多少の書物を読んで学ぶべきことなどを説く。

〔備考〕 第一・二・一三巻を抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 〔翻刻〕『東洋女訓叢書』四編。〔影印〕『江戸時代女性文庫』三六巻。

本佐録（ほんさろく）

〔異称〕 書名は外題による。首題・序題ともに同じ。

〔書型〕 半紙本二卷二冊（本編一冊・附録一冊）。天地二二五^ミ。

〔作者〕 本多正信作（本書の内容が『仮名性理』と酷似するため藤原惺窩作とも）。柴邦彦（柴野栗山）・室直清（鳩巢）序。本多正信は江戸時代前期の幕臣で、天文七年（一五三八）生、元和二年（一六一六）六月七日没。七九歳。本姓、藤原。名、初め正保・政行、のち正信。通称、弥八郎。三河の人。永禄六年（一五六三）三河一向一揆に加わった廉で追放されるが、のち帰参。徳川家康に優れた政治手腕を買われ、側近として重用された。天正一四年（一五八六）従五位下、佐渡守。同一八年、関東総奉行。関ヶ原の戦の後、江戸幕府で重きを成し、慶長八年（一六〇三）老職を勤めた。
*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 江戸前期作。延宝五年（一六七七）五月、林学士（林鷲峯）跋。享保一〇年、室鳩巢序。天明七年（一七八七）十一月、山本中郎跋・刊。「京都」平安読書室板。

〔内容〕 二代將軍秀忠の下問に答える形式で綴られた正道論書。第一「天道を知る事」、第二「身を端する事、付、我身の行、国の政道悪しきを前廉に知事」、第三「諸侍の善悪をしる事」、第四「国持の心を知る事」、第五「家を継べき子をえらび、付、後見の人、并、おとなやくの人えらぶ事」、第六「百姓仕置の事」、第七「異国と日本との事」の治要七カ条を説く。このうち第五条に世嗣教育の心得が見え、人間の大半が「上智」や「下愚」ではなく、教育次第で善悪に移る「中智」の者であり、世嗣選びはその智慧を十分吟味すべきこと、また、幼少から「律儀にして智慧ある人」や「正路にして軽薄いはざるもの」を側に置き、近習には「正直にして智慧才覚ある者」を置くべきことを説く。そのほか、幼少から聞かせる話に注意を払い、無用の芸を教えず、悪影響を及ぼす者を決して近付けるなど戒める。

〔備考〕 本編の一部を抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 〔翻刻〕『日本教育文庫・家訓篇』、『日本思想大系』二八巻「藤原惺窩・林羅山」。『子育ての書』一（抄録）。〔影印〕なし。

愚婦のむかし（ぐふのむかし）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題ともに同じ。
〔書型〕特大本一冊。天地二八^ミリ。

〔作者〕信齋作・序。作者は江戸時代中期の漢学者で、生没年不詳。

〔年代〕享保二年（一七一七）五月作。延享五年（一七四八）五月跋・書。

〔内容〕「はなむけ草（贖草）」と「愚婦のむかし」を合本した女訓書『婦人警戒集』の後半部。跋文に「右此二書、『はなむけ草』は先儒の息女へ給ひし書也。『愚婦のむかし』は信齋先生の姪子の方へつかわされし書なり。よくく御覽あれがしとぞんじ候。今此二巻をあわせて『婦人警戒集』と名付侍り」と記すように、本来別々の女訓書である。冒頭に「一筆申上まいらせ候。兼て申入候通、婦人の道は丈夫^{おとこ}とちがい埤^{しちが}ひ順^{しん}ふをもつて自然のみちといたし候…」で始まる文章で本書の由来や心得を述べる。ここに収録した「愚婦のむかし」は、跋文に「姪なる者の今年七才になるが雨の日来りて、むかし語れといふ侍るまゝ、舌切すめの舌の廻らぬむかし語もうるさし、是よみて見よかしとて、反古のうらに終に筆をぬぐいて送り侍り」とあり、末尾に「享保二酉五月十日」と記す。本文は「むかしくから国の堯舜の御代には、かしき教の道有て、位高き人恥有。さむらいは更也。とうふうるおやぢ、茶つむ小あま迄、人の人たる道を知りて父母に孝をつくし、臣としては奉公にかけごなく、兄弟むつまじく、夫婦あい正しく、友だちたのもしく…」と書き始め、数段に分けて、人道、欲、明德、人倫、分限、孝行、学問・読書、智恵などについて教え諭す。また、最後を「水はたゞ、器によりて、円くなり、四角にもなる、そのごとく、人も難波の、善あしは、皆習わしに、よる物を、あしき事には、まじはらず、行儀正しく、よき人に、親しみよれば…」で始まる教訓長歌で締め括る。育児については本文中程（四一頁以降）の「人はおさなきよりの習はしが大切なる物にて候」で始まる一条に詳しく、母親の育児上の役割について述べている。

〔備考〕『婦人警戒集』の序文と後半部「愚婦のむかし」を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕なし。【影印】なし。

塵斗（ちりとり）

〔異称〕書名は外題による。柱題も同じ。首題・尾題は「塵とり」。

〔書型〕半紙本三卷三冊。天地二二^ミリ。

〔作者〕手島宗義作・序。上河正^{上さあきら}揚（淇水）校。作者は江戸時代中期の心学者で、生没年未詳。京都の富商近江屋の主人。初め富永氏。上河氏とも。名、宗義。号、蓋庵。生家は奈良の富永氏で、妻は上河氏。子は心学者で有名な手島堵庵（本書跋文を書いた手島健は堵庵の子、校訂者の上河淇水は堵庵の養子）。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕享保九年（一七二四）一〇月自序。天明七年（一七八七）五月、手島健（和庵）跋・刊。〔大阪〕秋田屋太右衛門ほか板。

〔内容〕作者が家業のかたわら、人から聞いた話や諺などのうち心に残った事などを子孫のために書き綴って一書とした教訓書。上巻に商家主人の心得とともに、子弟教育や奉公人教育に関する記述が散見される。冒頭で「商家の主たるものは身持が肝要なり」と主人や親の心構えを強調し、特に衣食住における奢りを戒め、また、奉公人を親代わりとなつて教育すべきこと、商家の財産・儲けは全て主人のものではなく奉公人や親類等のためにあることなどを説く。育児については、幼時からの養生、七、八歳以降の読み書き教育や緩やかな育児、一五、六歳以降の家業教育や善良な交友関係、遊芸の禁止、家業出精と儉約（そのために害にならぬ程の借金を譲るのが我が子への愛情とする）とともに、男子なら器量に応じた商売を仕付け、女子なら婚家の聲の器量をよく吟味せよと諭す。このほか奉公人対する様々な心得について述べている。

〔備考〕上巻の全部と下巻の一部を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕なし。【影印】なし。

守刀（まもりがたな）

〔異称〕書名は外題による。序題「通俗保常守刀」。

〔書型〕大本一冊。天地二五八^ミリ。

〔作者〕杉山文理作・序。作者は江戸時代中期の道学者と思われるが、生没年その他未詳。号、梅月堂。

〔年代〕享保九年（一七二四）九月自序。享保一〇年（一七二五）一月作。延享二年（一七四五）四月書。

〔内容〕作者の子弟かくく親しい者に書き与えた教訓書と思われ、前文（「守刀取訓（捌か）」）に続いて、奉公人に対する主人の心得を述べた「君道」、父親の心を述べた「父道」、子の心得を述べた「子道」を始め、「夫婦」「兄弟」「朋友」「教訓」「和歌（道歌）」「追加」の一〇章に分けて書き記したもの。育児については、前文で「生質うまれつきの俚」で親が全く教育を施さないのは、子供が一生を誤り恥をさらすことになるため、それを避けるために本書を分かりやすく記した経緯に触れ、「父道」三カ条で独特の育児論を展開する。すなわち、第一条で、親子が親しいのは「天然自然の道理」だが溺愛のあまり、子供の悪事や他人への乱暴などを見逃し、子供の思い通りに育てた結果、ついに親の目に余るようになって子供に体罰を加えて叱つても手遅れになるのは親の大罪であると指摘し、子供の悪事は草木と同様に早い段階で芽を摘むべきで、甘やかしや姑息の愛は子供を捨て殺すも同然であると戒める。第二条では、子供は厳しく教育すべきだが、余りに厳しすぎると病者となるため加減・斟酌が必要ことや、一〇歳以前とそれ以後の育児の要点を説く。第三条では幼時から小さな過ちも許さず折檻し、日常生活に必要な読み書きにも徐々に習熟させよと述べている。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

民家分量記（みんかぶんりょうき）

〔異称〕書名は外題による（見返題・跋題も同じ）。首題・目録題「百姓分量記」。柱題「民分量記」。尾題「分量記」。

〔書型〕半紙本五卷五冊。天地二二七^ミリ。

〔作者〕常盤潭北作・跋。成島錦江序。作者は江戸時代中期の俳人・医者で、延宝五年（一六七七）生、延享元年（一七四四）七月三日没。六八歳。初め渡辺氏、のち常盤氏。名、貞尚。字、堯民。号、潭北・百華・百華莊・百花斎。新井堯民と称した。下野那須郡烏山の人。医を業とし、俳諧を其角に学び、蕪村とも親交があった。晩年は関東各地を巡り、農民に道を説き、また教訓書を著すなど庶民教化に努めた。*『国書人名辞典』

参照

〔年代〕享保一一年（一七二六）八月跋・刊記。同年一〇月、天野曾原（藤原景胤）跋・刊。「江戸」西村源六板。

〔内容〕庶民向けに天地・人倫の道や「分量」すなわち分を弁えた生き方を説いた教訓書で、第一巻に「発端」以下六章、第二巻に「親の慈、附、子の生育」以下九章、第三巻に「娶婦、択、並、去不去の弁」以下九章、第四巻に「百姓分量得心、並、増るを羨、他を稼事」以下六章、第五巻に「陰徳の弁、附、もろこし于公の事」以下四章を載せる。このうち第二・三巻に育児についての記述が見え、我が子の一生を決める家庭教育の重要性を説き、師に付けることができなくても、せめて悪道を教えぬように努めよと諭す。また、子を甘やかす舐慣の愛の果てに我が子を勘当し殺害に及ぶ場合もあると警告し、親不孝の罪は「親に七ツ、子に三ツ」と戒め、過保護・溺愛が子のためにならないことや乳母を付ける際の心得に言及する。そのほか、全ての物事が己の心を正す契機になることや、我が子を師に付ける意義と師匠の教育を無にしないための親の心得、さらに、庶民の学問の仕方などにも触れる。

〔備考〕第一〜三巻および五巻より抄録。本書は広く流布し、後続の教訓書に多大な影響を及ぼした。また、次項

『玉置 仮名文章』の巻末広告（四一三頁）に「土農工商の身持心得をひらがなにてしるす」とある。小泉吉永蔵。

〔底本〕

〔文獻〕【翻刻】『日本教育文庫・訓誡篇』、『日本思想大系』五九卷「近世町人思想」、『栃木県史・史料編（近世八）』、『子育ての書』二（抄録）。【影印】『家政学文献集成・続編』江戸期Ⅰ。

〔玉置〕 仮名文章（かなぶんしょう）

仮名文章

〔異称〕 書名は『江戸出版書目』（一九頁）による。

〔書型〕 大本一冊。天地二七四^ミ。

〔作者〕 玉置茂八作・書。作者は江戸時代中期の書家で、元禄七年（一六九四）生、明和五年（一七六八）八月一七日没。七五歳。名、栄長。通称、茂八・茂八郎。号、筆華堂。淡路の人。玉置喬直^{たけなほ}の門人。江戸橘町一丁目に住し、書を業とした。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 享保一五年（一七三〇）一〇月書・刊。「江戸」西村源六板。

〔内容〕 「秋の夕暮いともさびしきに、たまぐらのねぶりもさめて夢のうちなる五十年、人間の苦楽こしかた行末、われ人の上をおもひつゞけまいらせ候にも、はかなきことわざどもにこそ、此世にながらふるわづかのうちに善をつむ人はまれにして、あくをかさぬるのみかぎりなく覚ゆれ…」で始まる長文の女子教訓を認めた書道手本。育児については、「おさなき時よりよき人にしたがふて、見なれ、きゝなれゐたれば、をのづからわが身のよしあしをもわきまへしる事にて候」と、幼時からの良い習慣を重視し、特に女性には懐妊中の身持ちが大切であるとして胎教のあらましを説く。また、男女ともに幼い時は理解できなくても「あけくれに理りをつくし、いろ／＼に教をなして、よしあしの差別をしらしめみちび」けば、幼児といえども本来仏性を持ち備えているため、成長するに従って良い道に進むことから、「おさなきうちの手入れ第一」と幼児教育の大切さを強調する。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『稀観往来物集成』二九卷。

もしほぐさ（もしおぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。異称「藻汐草」。

〔書型〕 特大本一冊。天地三二〇^ミ。

〔作者〕 藤堂嵐子作・序。山崎義故編・跋。作者は江戸時代中期の武家女性。伊賀上野の一〇〇〇石の家臣・藤堂鞠負家に生まれ、五〇〇〇石の藤堂新七郎良族に嫁ぐ。新七郎は正徳五年（一七一五）二月、江戸出府中に疱瘡のため二八歳の若さで客死。彼女は二児（良躬・須磨、長女栄は早世）を養育し、次女須磨が藤堂隼人長勅に嫁ぐ際に本書を書き与えた。

〔年代〕 享保一七年（一七三二）四月作。天保七年（一八三六）三月跋。同年一〇月刊。「江戸」至樂堂蔵板、岡村屋庄助売出。

〔内容〕 四〇代の嵐子が嫁いでいく娘（須磨）のために記した女訓書。その原本は延享三年（一七四六）に三四歳で他界した須磨の遺品中に発見された後、代々受け継がれ、約一〇〇年後、津藩土山崎義故によって上梓された。内容は、執筆意図を略述した前文と長短合わせた四四カ条からなり、女性の学問の大意、男女の役割、女子三従、舅姑への孝養、夫への服従、武家婦人の忠孝といった理念のほか、夫の四季の衣装の準備や旅立つ夫に対する態度、化粧・身だしなみ、奉公人指導、信仰のあり方など、日常生活全般の具体的な心得を繰々論ず。育児については、末尾で「子をそだつる道は、我いまだ孟母の誠をえず。善にみちびき、悪をこらす事のいたらざるを常に恥る所なれば、筆をさしをくべし」（五二六頁）と具体的な記述を控えているが、女性も仮名文の教訓書（『列女伝』『女四書』等）を学ぶべきこと、継子であっても我が子同然に誠を尽くして育てるべきことなどを説く。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『藤堂藩藻汐草』（三重県郷土資料刊行会叢書・六六集）。〔影印〕『江戸時代女性文庫』七五巻。

民家童蒙解（みんかどうもうかい）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題ともに同じ。柱題「童蒙解」。

〔書型〕半紙本三卷（上下二巻・附録一卷）五冊。天地二二八^ミ。

〔作者〕常盤潭北作・序。作者については『民家分量記』解題を参照。

〔年代〕享保一九年（一七三四）三月自序。享保二〇年四月、一竿舎兆翁序。附録、享保二〇年五月作。元文二年（一七三七）一月刊。「江戸」西村源六板。

〔内容〕門人俣田千之に与えた潭北の講演録を『民家分量記』続編として上梓したもの。上下を二分冊して第一、四冊とし、附録一卷を第五冊とする。上之一は「発語（二八カ条）」。上之二は「或問孝」以下一一項、下之一は「郷党和順」以下一二項、下之二は「教育」以下七項を収録するが、育児については下之二の「教育」三カ条と「婦人」五カ条に記述がある。まず「教育」項では、「人の我俣といふものは、成長の後、俄に出来たるにはあらず」としてそれが親の教育の失敗であることを指摘し、それは取り返しのつかない「一生ぬけかぬる病」であると戒める。そして、胎教からの育児とともに、それ以前に心立ての良い女性を娶ること、性交の慎みや乳母・傳母^{にゅうぼもり}の吟味など入念な幼児教育の心得を説く。また、「幼児教育は自然に任せ、善悪にこだわらずに育てよ」とか「厳しい仕置きは子供の心を僻ませ子供を病気にさせる」というのは誤った考えであり、誕生とともに長い年月をかけて教育することが重要と述べる。そのためには、両親や乳母が正しい生き方をするのが何より大切だと強調する。一方「婦人」項では、「娘幼少の時より『大和小学』『姫鑑』の類ひ、仮名書の『列女伝』など読ならはせたし。『源氏物語』などの類ひは仮にも見せぬがよし：」など女子教育にも言及する。

〔備考〕第一・四・五巻の一部を収録。序文を書いた一竿舎兆翁については未詳だが、宝暦五年（一七五五）刊『今川童蒙解』の作者・蕪菜軒狸臍（一竿舎釣翁^{ちようこう}）と同一人か。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『日本教育文庫・訓誠篇』、『栃木県史・史料編』近世八、『子育ての書』二（抄録）。【影印】なし。

与奥津氏女書（おきつしのむすめにあたうるしよ）

〔異称〕書名は外題による。首題「与奥津氏之女書付」。

〔書型〕大本一冊。天地二五九^ミ。

〔作者〕稲葉迂斎作・書。作者は江戸時代中期の漢学者で、貞享元年（一六八四）九月一七日生、宝暦一〇年（一七六〇）十一月一〇日没。七七歳。初め鈴木氏。名、初め通経、のち正義。通称、十五郎・十左衛門。号、迂斎。佐倉藩士鈴木正則の男。江戸の人。三宅尚斎・佐藤直方・浅見綱斎に崎門学を学ぶ。正徳五年（一七一五）肥前唐津藩に仕え、藩校盈科堂の教授を務めた。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕元文五年（一七四〇）二月作・刊。「江戸」著者蔵板か。

〔内容〕元文五年一二月に興津氏の娘が奥田某に嫁ぐにあたり、迂斎が書き与えた女訓書を上梓したもの。前文と一二カ条の条々から成る。まず前文で、当代は女子教育が疎かになっていることや、本書の執筆理由などに触れる。以下、一つ書きで、婦人は外出すべきでないこと、婦人の徳・婦人の職、他家へ嫁ぐ意味と心得、信・貞、父母・舅姑への孝、嫉妬、懐妊中の慎み、子育て、女子三従、心の慎み、狂女、真の幸福について説く。育児については、第一条で娘が一〇歳になったら婦人一生の守りである「婉・婉・聴・従」の徳を教えるべきこと、第七条で懐妊後の胎教の心得、第八条で育児における母親の重要性や育児法、また、子供の悪を父に隠すべきでないことなどを諭す。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】『往来物分類集成Ⅱ』R八・一二、『家政学文献集成・続編』江戸期VI。

教訓女朝鏡（きょうくんおんなあさかがみ）

〔異称〕 書名は首題による。外題「（新板絵入）教訓女安佐可、美（教訓女あさかゝみ）」。柱題「女朝鏡」。

〔書型〕 半紙本五卷五冊。天地二一七^ミ。

〔作者〕 津熊武範作・跋。作者は江戸時代中期の往来物作者。河内交野の人。生没年未詳。名、武範。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 宝暦三年（一七五三）一月、柳山堂（北越散人）序・刊。「京都」正本屋吉兵衛板。

〔内容〕 講学・勤謹・孝愛・節義・柔弱の五編に分けて女性心得を説いた絵入りの女訓書。序文では才知ある賢女ならば曹大家の『女誡』、明の孝慈高皇后の『内訓』、その他『劉向列女伝』や各種孝子伝などを日々の鏡とすれば良いが、そうでない女性のために「をのづから其道を悟り、聞に付て近く我身の善悪を知る鏡」とするために本書を著したとする。胎教に始まる女子教育や種々の女子心得を、日本および中国の古典や説話、歌などを引いて論ず。育児については第一巻「講学」に記述があり、子供が善人となり悪人となる原因が「母の娠る時のをこなひ」にあるという観点から胎教の重要性を述べ、また、母親が聖人の道を学んでおくとともに、幼時から子供に道を教えて正しく育てる（悪いことは早く戒め、良いことは小事でも教え聞かせる）ことが大切と説く。特に女性は家庭教育の期間が短いため、日々怠らず教えることが重要で、幼時の子守りには適切な女性を選び、五、六歳から師匠を吟味して読書・績紡・裁縫を教え、さらに、男女の別を守らせるとともに、身を失う基となる遊芸を禁ずべきだと説く。このほか女性の家庭内での役割や許嫁の弊害に触れ、最後に、種々の教えの根本が誠であり、誠心をもつて育児にあたり、子供を欺き、偽り教えるようなことがあってはならないと戒める。

〔備考〕 第一巻の全てと第五巻の一部を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 【翻刻】なし。【影印】『江戸時代女性文庫』八七巻、『往来物分類集成Ⅱ』R一一。

女教補談囊（じょきょうふたんぶくろ）

〔異称〕 書名は見返題による。

〔書型〕 大本一冊。天地二六四^ミ。

〔作者〕 村井淇水作・序。鈴木春信画。作者は江戸時代中期の上方の往来物作者で、生没年その他未詳。号、雪悦斎。

〔年代〕 宝暦四年（一七五四）三月刊。「京都」菊屋七郎兵衛板。

〔内容〕 「何某大納言殿御消息」を主内容とする女子用往来。「何某大納言殿御消息」は、一通の消息文に見立て女子に必要な教訓を箇条書きにした『仮名教訓』系の往来で、『仮名教訓』一一カ条を改編した七カ条から成る。第一条「慈悲の心」、第二条「接客態度」、第三条「使用人指導法」、第四条「夫婦和合」、第五条「非情な友への誠意」、第六条「社交上の会話や礼儀」、第七条「謡・舞等の鑑賞態度」について説く。続いて「附録」として、女子一生の心得をまとめた四六カ条の教訓と、「茗話はなし」と題した説話一七話を載せる。育児については「附録」に、女性六歳から六〇歳代までの年代別教育論・生涯指針が記されている。

〔備考〕 全冊を収録。なお「附録」は本集成第一〇巻所収の『新女大学要鑑』とほぼ同文であり、さらに、宝暦一三年刊『女用文文庫』の頭書「婦人身持鏡」にもほぼ同文を載せるが、三者を比較すると、本書の「附録」をそれぞれ参照して「婦人身持鏡」と『新女大学要鑑』が編まれた経緯が分かる。すなわち、前者は「附録」をやや簡略化する形で綴られ、後者は「附録」の所々に増補（特に長文の「胎教」「蚕の教訓」を増補）する形で綴られている。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 【翻刻】『生活文化研究所年報』六輯（ノートルダム清心女子大学）。【影印】『往来物大系』八八巻、『往来物分類集成』R四〇、『往来物分類集成Ⅱ』R八。

貞丈家訓（ていじょうかくん）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・目録題・首題とも同じ。序題「安斎氏家訓」。一名「伊勢貞丈家訓」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二一ミ。

〔作者〕 伊勢貞丈きたけ作・序。屋代弘賢（輪池、詮賢）校・序。作者は江戸時代中期の幕臣ならびに有職故実家で、享保二年（一七一七）一月二八日生、天明四年（一七八四）五月二八日没。六八歳。本姓、平。名、貞丈（俗にテイジョウ）。通称、兵庫・平蔵。号、安斎、銀郷散人。江戸麻布生れ。享保一年に家督を嗣ぎ、寄合より小姓組となった。独学で故実を修め、文献中心の忠実な考証と明快な説明を特徴とし、「伊勢流」として広く行われた。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 宝暦一三年（一七六三）十一月作。文政二年（一八一九）五月、山本長孝（沢彭）跋。天保八年（一八三七）二月、屋代弘賢序。同年春刊記。天保一二年冬、松山堂序・刊。〔江戸〕堀野屋儀助（宝翰堂）板。

〔内容〕 武家故実家として知られる伊勢貞丈の家訓を上梓したもの。五常・五倫・先祖・家業・衣食住・神仏・酒色財奕・苦楽・慎独・省身・改過・非理法・権天・儉約・堪忍・自暴自棄の一五章に分けて説く。育児については、「五倫の事」に若干の記事があり、父子関係（この「父」には母の意味も含まれるとする）における「親」について触れ、続いて、父母の育児について「父は子をきびしくそだて、行儀を直し、芸能ををしへ、物事を能くいひ教しへ、悪き事をしかり、いましめ、よき人がらにそだてあげて、人にもほめさせる様にと世話をやり、其子の為になる様にしつけをするは、父の慈悲にて、父の法也」、また、「母は物やはらかにして、子をいたはり、父のきびしきを、子の心にはらたゝず、わろく思はぬ様に能々道理をいひ聞かせて子の心をやはらげて教へそだつるは、母の慈悲、母の法也」と説く。また、養父母の養子に対する心得や舅姑と嫁の間の心得にも言及する。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本教育文庫・家訓篇』、『日本思想大系』二七巻「近世武家思想」、『武士道家訓集』（有馬祐政ほか編）。〔影印〕なし。

女学則（おんながくそく）

〔異称〕 書名は序題・首題による。文化一四年（一八一七）板の外題は「女学則操鑑」。

〔書型〕 大本一冊。天地二五七ミ（江戸中期刊本）。

〔作者〕 鳥飼醉雅（吉文字屋市兵衛）作・序。月岡雪鼎画。作者は江戸時代中期の大坂書肆で、享保六年（一七二一）生、寛政五年（一七九三）一月二三日没。七三歳。鳥飼氏。名、昭。字、清廉。通称、吉文字屋市兵衛（三世）。号、醉雅、醉雅臘月・洞斎・定栄堂。大坂書肆二世吉文字屋市兵衛（鳥飼定栄）の男。幼時から家業に対する自覚を持ち、広く天下の書を渉猟してこれに通じ、自らも多くの書を著した。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 明和元年（一七六四）九月序。明和二年一月刊。〔大阪〕吉文字屋市兵衛・〔江戸〕吉文字屋治郎兵衛板。本文「女訓」は『和俗童子訓』等によりながら年代別の女子教育や婦道のあらましを述べたもの。まず「女子は外に出て師に従ひ、友に諫らるゝの道なく、世のよしあしにもうとく、ひとへに父母のおしへをもつて世を立るものなれば」と女子教育の必要性を強調し、以下、箇条書きで、第一条「早期教育の重要性」、

第二条「乳母の選択」、第三条「男女の別」、第四条「浄瑠璃・三味線の禁止」、第五条「右手の使用（二、三歳）」、第六条「方角・数字・いろは・百人一首の学習（四、五歳）」、第七条「男女の別と礼儀作法（七歳）」、手跡修行・読書・礼儀（八歳）、裁縫教育・諸芸（一〇歳）、第八条「やさしき心延え」、第九条「柔和な態度」、第一〇条「父母・舅姑への孝行」、第一一条「傲慢の戒め」、第二一条「侮蔑の戒め」、第二三条「下の僕への憐愍」、第四条「家内の風紀」、第五条「言葉の慎み」、第六条「堪忍」、第一七条「女の五徳」を説く。また、前付の「女教訓百ヶ条」にも、第二二条「乳母を置に、心根のすなをなる、やかましくなきものをおくべし。さなき物は子の為にあしゝ」などの育児心得が多く見られる。

〔備考〕 江戸中期刊本より「女教訓百ヶ条」と「女訓」一五力条等を収録。また、参考として明和二年板と文化一四年板の一部を掲げた。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『往来物分類集成』R四〇、『往来物分類集成Ⅱ』R一三。

女芸文三才図会（おんなげいぶんさんさいずえ）

〔異称〕 書名は外題による。

〔書型〕 大本五巻五冊。天地二六七^ミ。

〔作者〕 鳥飼醉雅（吉文字屋市兵衛）作・序。作者については前掲『女学則』解題を参照。

〔年代〕 明和五年（一七六八）三月、鳥飼昭（醉雅）自序。天明（一七八一〜八九）頃刊、天保一二年（一八四一）一〇月、三浦茂樹序・再刊。「大阪」秋田屋良助ほか板。

〔内容〕 大阪・吉文字屋板の女子用往来数点を組み合わせたもの。諸本により収録内容や順序に若干の異同があるが、「十二月和歌」「蹴鞠和歌」「娘教訓和歌百首」「百人一首」などの和歌および教訓歌、「幼女そだて草」「女手習状」「女嬢方百箇条」「教訓百箇条」などの女子教訓、「本朝賢女略伝」や婚礼祝言・食札等の礼法、香道・化粧その他の記事から成る。収録した第五巻「女教訓百ヶ条」に育児についての記述が見え、まず序文で「父母の心掛けや身持ちが正しくなければ娘を正しく育てることができない」と説き、全一〇〇カ条中に「一、子を教えるの道、心の明徳を明らかにして、あしき道にいらざるやうに教ゆべき事」、「一、おさなき時は、言葉をもつて教さとす而已にては、聞うくる事なし。をしえずとも、父母、めのとの心ざしを自然と見習ふ物なれば、父母行儀よく正しければ、子は教ずして正しく成ぬべき事」、「一、子を教えるの道、胎教とて既に身持になれば、寝るにそばだゝず、坐すにかたよらず…」の如き条々を掲げる。中には「一、乳母を撰ぶ事、くはしく『女学則』に出たり。これを読むべき事」とか「…読習べき書は、『和論語』『姫鑑』『女四書』『堪忍記』『女訓抄』『女今川』『女学則』等のみちを知るの書をよましめ、『古今』よりはじめ、歌学の書を心がけて読べき事」と自著の宣伝文も含む。このほか、五、六歳以降の年代別教育論を数カ条にわたって記す。

〔備考〕 第五巻を抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

こころ得歌（こころえうた）

〔異称〕 書名は首題による。題簽題「教訓」こころ得哥」。柱題「心得哥」。

〔書型〕 大本一冊。天地二六六^ミ。

〔作者〕 二生堂作・序。清水橋井堂ほか書。作者は江戸時代中期の人で、京都の書家および手習師匠と思われるが、生没年その他未詳。

〔年代〕 天明元年（一七八一）刊。「京都」林伊兵衛ほか板。

〔内容〕 例えば、親が子に教訓書の如き親孝行を強要したり、夫が妻に『列女伝』を押し付けたりすることはかえって災いの基になるため、父には父の道、子には子の道、姑には姑の道、嫁には嫁の道をそれぞれ立ててまず己を反省することが大切であるとして、家族構成員のそれぞれの立場の教訓歌を集めたもの。父の心得・子の心得・母の心得・母に対する子の心得・舅の心得・嫁の心得・姑の心得・姑に対する嫁の心得・兄の心得・弟の心得・夫の心得・妻の心得・媒の心得・百姓の心得・細工人の心得・商人の心得・師の心得・弟子の心得・朋友に交わる心得・心を治むる心得・身を治むる心得・家を治むる心得・世にまじわる心得・貧しきものの心得・多言なる者の心得・養生の心得・物喰う時の心得・着物きる時の心得・天地を恐るる心得・天命をしかる心得・理の極まりなきをしる心得・平生の心得・君の御心得・臣の心得の三四項に分けて教訓歌二一七首を掲げる。

これらの道歌を京都の手習師匠三〇名に書かせているのも独特で、巻末執筆者一覧には女流書家も少なくない。育児については、父の心得に「行儀としてしめて呵れば気がされる かなはぬ事は人にいはせよ」「子宝と常にはいへどかんしやくの おこつたときは言語どうだん」など八首、母の心得に「産だ子と思ふはぐちの至り也 女の役とかねてしらずや」「一生の不和の種とはしらずして 弟のみに味方するおや」など四首を掲げる。

〔備考〕 全冊を収録。なお、本書と同体裁の姉妹編『こころもち歌』（二生堂作、清水橋井堂書）が翌年に出版されている。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

農家訓（のうかくん）

〔異称〕 書名は外題による。首題・序題・目録題・柱題ともに同じ。

〔書型〕 半紙本二巻二冊。天地二二三^ミ。

〔作者〕 山名文成作。作者は江戸時代中期、紀伊名草郡永穂村の農民で、庄屋または農業指導者と思われる。生没年未詳。名、文成。公共事業に尽力し、農耕の暇に本書を著した。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕 天明四年（一七八四）三月作・刊。「大阪」柏原屋与左衛門板。

〔内容〕 上下二巻からなる通俗教訓書で、上巻に「四恩」「五常」「農民用心の説」「赤子養育成人弁」「準繩曲尺弁義」「始末の主旨は早く知るに在る説」の六章、下巻に「天下の三民同恩の解」「小童へ学を勧むるの説」「堪忍両義章」「三光天象違はざる義」「孝行意得の説」「上下通情の弁」の六章を掲げる。育児については、第二章「赤子養育成人弁」で百姓にとって五穀の種を選ぶことが何より重要であるのと同様に、育児も妊娠・出産時から父母が誠の心で正しい行いをして親孝行な善人に育てること（善き種をうへて、善き花を咲せ、善き実を取る事）が大切であり、幼時より溺愛による誤った教育を斥け、八歳になったら読み書きを教え、徐々に家業も習わせるべきと説く。その際、「短慮にして罵り怒りおし」えることは子供の心をひねくれさせてしまうため十分に注意せよと警告し、「不孝の罪は親に七分、子に三分」と諭す。また、第六章「小童へ学を勧むるの説」では農家子弟の余力学問について良き師を選び善を教えるべきこと、また、手習い・学問にも過不及や中庸の心が大切なことを説く。さらに第九章「孝行意得の説」では、「父子の間は善を責めず。善を責むるときは離る。離るときは不祥これより大いなるは莫し」など親子間の心得を述べる。

〔備考〕 上巻より第二章、下巻より第六・九章を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本経済叢書』一五巻、『日本経済大典』二二巻、『子育ての書』二（抄録）。【影印】なし。

丙午さとしばなし（ひのえうまさとしばなし）

〔異称〕 書名は外題・見返題による。柱題「丙午曉示」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二四^ミ。

〔作者〕 木節堂作。高安庄次郎書。法橋玉山画。木節堂自筆稿本『丙午縁起』（名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵。同書詳細は同図書館ホームページ参照）によれば、作者は江戸時代後期、和歌山北町の職人（木櫛挽・亀甲櫛笄）で、和泉屋源右衛門と称した。

〔年代〕 天明六年（一七八六）一月刊。弘化三年（一八四六）再刻。「和歌山」総田屋嘉兵衛ほか板。

〔内容〕 『丙午縁起』によれば、本書刊行の経緯は次の通り。天明五年九月一三日夜、何者かが和歌山の各地に張り出した「丙午ノ縁起」を広めようと、作者が仲間の田辺屋宗助（和歌山御坊六軒丁の指物箒箆職人）や直川屋長兵衛（和歌山本町の質屋）と図って、それを模刻した一枚刷りを大量に印刷し、大坂・京都・伊勢（松坂では地元書肆柏屋兵助が新規に上梓）大阪から江戸までの各地で配布して回った。その後、六〇年後の丙午を憂慮して、その趣旨を版本に編集して天明六年に京都で上梓したのが『丙午さとしばなし』で、初版本は京都・大坂・江戸で各一〇〇冊、和歌山で二〇〇冊が施本として配られ、ほかに、和歌山本町の丁子屋安兵衛も五〇冊を印施したという。後に、その版木が地元書肆総田屋に譲渡され、当初の遺志通り六〇年後の弘化三年丙午に再刊されたのが底本である。内容は、ある老人が「丙午の諭し書き」の意義やその普及に奔走した際の体験談を語る形で綴られており、「丙午の諭し書き」が民間ベースで普及していく状況を記した一種のルポルタージュである。例えば、本書巻頭の某神社奉納額には「我は当年六十歳にして、かねて両親の云われしに、其の方は丙午の年、別して丙午の日生まれなれば、一生仕合わせ悪しからんと聞く。然るに、子も男女二人有りて、妻子とも息災にして、甚だ仕合わせよし」とあり、丙午生まれの人々が自らを証明役として地域社会に丙午の迷信を払拭すべく活動していった様子も分かる。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。【影印】なし。

草茅危言（そうぼうぎげん）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・序題・柱題ともに同じ。

〔書型〕 中本五卷五冊。天地一八五^ミ。

〔作者〕 中井竹山作・序。富岡百鍊（鍊斎）校。作者は江戸時代中期の漢学者で、享保一五年（一七三〇）五月一日生、享和四年（一八〇四）二月五日（二日とも）没。七五歳。名、積善。字、子慶。通称、善太。号、竹山・竹山居士・同関子・溧翁・雪翁。諡号、文惠先生。漢学者中井鷺庵の長男。弟、履軒。大阪生れ。寛保三年（一七四三）懷徳堂助教五井蘭洲に学ぶ。宝暦八年（一七五八）父の死により懷徳堂預人となり、天明二年（一七八二）三宅春楼が没し、その後を承けて懷徳堂四世学主となる。寛政四年（一七九二）火災で焼失した懷徳堂の再建に努め、同八年、再建を果たし、翌年、職務を子の蕉園に譲り隠居した。詩文を能くし、混沌社の文人らとも親交を持った。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕 寛政元年冬自序。明治元年（一八六八）一〇月刊。〔京都〕近江屋佐太郎ほか板。

〔内容〕 天明八年六月、大老就任間もない松平定信が大坂を訪れた際、定信が竹山に諮問した事柄などを後にまとめて献上した経世論の書（第一卷Ⅱ天明八年Ⅴ第五卷Ⅱ寛政三年脱稿）。書名の「草茅危言」は民間の立場からの率直な意見という意味を込めたものという。第一卷は「王室之事」以下一五章、第二卷は「御廳下之事」以下一二章、第三卷は「地理之事」以下一〇章、第四卷は「戸口之事」以下一〇章、第五卷は「米相場之事」以下一七章で、全六四章を収録する。このうち育児関連記事が第二・四・五卷に見え、第二卷「学校之事」では「学校ノ衰ヘハ世ノ衰ル基」と位置づけて教育制度のあり方を説き、第四卷「窮民ノ事」では間引きや人身売買に対する意見を、また、第五卷「捨子ノ事」では捨て子対策案について述べている。

〔備考〕 第二・四・五卷の一部と序文・刊記などを抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本経済叢書』一六卷、『日本経済大典』二三卷、『子育ての書』三（抄録）。【影印】『草茅危言』（懷徳堂記念会編）。

多波礼具左（たわれぐさ）

〔異称〕 書名は第一卷外題による。見返題「たはれぐさ」。首題「芳洲先生たはれぐさ」。柱題「芳洲先生集著」。

〔書型〕 大本三卷三冊。天地二六二^ミ。

〔作者〕 雨森芳洲作・序。室鳩巢跋。作者は江戸時代中期の漢学者で、寛文八年（一六六八）五月一七日生、宝暦五年（一七五五）一月六日没。八八歳。本姓、橘。名、俊良・誠清。字、伯陽。通称、東五郎・東。号、芳洲・尚綱斎・聚化軒。医者雨森清納の男。近江伊香郡雨森の人。少年時、医を志すが、のちに儒に転じ、貞享元年（一六八四）東下、木下順庵の門に入る。元禄二年（一六八九）順庵の推挙で対馬藩に仕官し、朝鮮語・中国語に習熟。同六年、対馬に渡り、以降、六代の藩主に仕え、外交や教育面に尽力した。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕 寛政元年（一七八九）九月刊。〔大阪〕高橋喜助ほか板。

〔内容〕 和漢の故事や教訓など種々の随感からなる随筆集で、育児に関する記述が各巻に散見される。まず、上巻では体罰に関する逸話がある。子供を毎日のように折檻する親に、ある人が「御自身の若い時は、何事も御両親の仰せの通りだったか」と尋ねると、その親は少し間を置いて「そうではなかった」と答えた。そこで「だからこそ、諺に『年こそ葉なれ』というように、成長とともに息子も弁えるようになるであろう」と戒めた。そして、子供を側に招いて「他人の親でさえ、年長けた者の残念な様子は心が穏やかでない（と知っている）のに、実親の心を朝夕苦しめていることに気付かないのは不思議なことだ」と論すと、子供は恥じ入って言葉がなく、その後は親子睦まじくなったという。また中巻では、丈夫な幼児の育て方や子供の養生についての記事がある。

〔備考〕 各巻の一部を抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『有朋堂文庫・名家随筆集』、『日本随筆大成』二期一三卷、『子育ての書』二（抄録）。【影印】なし。

童蒙示訓（どうもうじくん）

〔異称〕書名は序題・首題による。

〔書型〕大本一冊。天地二六四^ミリ。

〔作者〕大底杜多作・序。高橋梵仙著『日本人口史之研究』二卷（九四頁等）によると、作者は江戸時代後期の僧侶（曹洞宗）で、仙台・松音寺住職。僧名、道輝。道号、大底。宝暦元年（一七五一）生、寛政九年（一七九七）二月二三日没。四七歳。天明四年（一七八四）九月、藩主の命により名取郡西多賀村鉤取寺より入院上堂。在住中庫裡の再建に努め、寛政四年三月、仙台新寺小路松音寺第二三世となる。

〔年代〕寛政六年八月序・書。

〔内容〕「戒殺訓」「育児訓」「孝道訓」「制驕訓」「行忍訓」「慎言訓」「行実訓」の七章に分けて説いた教諭書。

松音寺は仙台藩の命により領民教諭の拠点となったが、童蒙の教訓用に作者の講話録を求める者が多いため、難解な仏語（仏教用語）を避けて儒教の「論孟等の語」を用いて平易に綴ったもの。育児についてはまず「戒殺訓」で、儒仏ともに「仁慈」を重視するが、仁慈の極みは命ある物を救うことである、しかしながら、東国では赤子を間引く者が多く、甚だしい場合は間引きが常習化していて恥すら感じない有様は耐え難いと歎く。経済的な理由による子殺しは禽獣以下の所業で、その原因は人間の三毒（貪・瞋・痴）に由来し、その報いは必ずやってくる、逆に、子殺しを止めることは「天下より重き人命を助る陰徳」であり、天の恵みが頂けるであろうと説く。また「育児訓」では、人間は誰もが善なる性を持って生まれても、その後の教育の善し悪しで賢愚の大きな違いが生じることから、胎教を始め幼時からの教育で子供を善心に向ける大切さを強調する。そのために最も重要なことは、父母がまず日々の言行を慎むことであり、その結果、子供は自然と「父母の方正を畏れて慈訓に服する」ようになる、従って、親は「^{あやま}過て改るに憚ること莫れ」の心掛けが大切であると諭す。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

女訓三乃道（じょくんさんのみち）

〔異称〕書名は外題による。首題「女訓三の道」。柱題・尾題「三の道」。

〔書型〕大本一冊。天地二六二^ミリ。

〔作者〕中村弘毅作・序。原在中・森川保之画。作者は江戸時代後期の漢学者で、生年未詳、天保五年（一八三四）二月四日没。八三歳以上。本姓、源。名、弘毅。字、士卿・士郷。通称、安右衛門。号、梅華・新斎。京都の人。麩屋町・高倉竹屋町・二条堺町等に住む。文化八年（一八一）刊『父子訓』（本集成第七卷所収）の作者でもある。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕文政六年（一八二三）六月自序。文政九年二月刊。「京都」吉野屋仁兵衛ほか板。

〔内容〕著者が子孫のために書き綴った教訓で、「娘の道」「婦の道」「母の道」の三教訓の後に、婦道全般を説いた「通論」を置く。「娘の道」では男女の別、手習い・女功、四徳、廉恥、貞節、三従など、「婦の道」では夫婦、舅・姑への孝養、内助、儉約など、「母の道」では胎教、幼児教育について論ず。また「通論」では女性の心持ちや、言葉を慎むこと、飲酒の心得、堪忍等を説く。『和俗童子訓』等の影響が随所に見られ、展開する教訓も当代一般のものである。頭書には「孝女」「貞婦」「賢母」のテーマ毎に和漢女性の略伝（薩摩の福依売以下二四人）を掲げる。育児については、「女の道」で先入主観に基づく早期教育の重要性や、男女の別など七歳以降の教育について述べる。また、「母の道」では胎教や女子教育の重要性を説き、「古人も父の子を教えるは母に一倍して、子の母に似る事父に十倍す」という言葉を引いて母親の子供への影響力や、夫の死後の育兒役割に言及し、さらに、育兒の要が「^{おとな}幼より先入を慎み、教訓を厳に」することであると結ぶ。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】『往来物大系』九〇巻、『往来物分類集成』R四〇、『往来物分類集成Ⅱ』R八・一三。

童諭宝富草（どうゆたからのとみくさ）

〔異称〕書名は外題・首題・尾題による。柱題「童諭」。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二九^ミ。

〔作者〕福田陳人作。作者は江戸時代後期の往来物作者で、生没年その他未詳。

〔年代〕文政七年（一八二四）九月、質磨道人序・刊。〔？〕著者蔵板か。

〔内容〕諸書より童蒙向けの諸教訓を集めた教訓書。まず「正しい心」や「人道」が人間たる所以であり、親や師の恩を知らない我が俚者は親に見限られ、親族・朋友・下僕に疎まれ、願い事も叶わず不幸になると述べ、従って、幼少の時から第一に「親に素直に従うこと」、第二に「行儀を学ぶこと」、第三に「算筆に励むこと」の三カ条を守れと諭す。続いて、「いかに弟子たち聞給へ、ろんずるまでにおよばねど、はやくもがてんいたされよ…」で始まる「いろは短歌」の全文や諸教訓を引いて幼時の躰を教え、また、本来、往来物や軍書・草双紙・端唄・浄瑠璃・芝居等の全てが心の糧になるが「下根才劣の今時の幼童」はそうすることができないと説き、さらに親孝行・女子三従・育児・五常等に言及する。育児については、三七頁以下で『東照宮御消息（家康公御文章）』（本集成一一巻所収）を引いて、立木のままに育てず、我が俚を戒め、軍書・草双紙、歌・浄瑠璃の文句、芝居の狂言に至るまで全て勸善懲惡の契機とせよと諭す。また、成人後の育児では「己が子を己が心のまゝにいたすは親たる人の誤り」と指摘し、あくまでも先祖からの家名や血筋を引き継ぐために、親自身が親孝行を心掛け、子供を厳しく育てよと教える。我が子を悪く育てることは先祖の名を汚すことであり、このような不孝の罪は「親に七分、子に三分」である、そのために甘やかさずに厳しく教えずはならないが、親が感情のままに子供に体罰を加えることは道の厳しき異見にはならず、幼時より間違つた癖を付けさせる結果となると戒める。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文獻〕【翻刻】なし。【影印】『往来物分類集成』R三一。

徳教篇（とくきょうへん）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題ともに同じ。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二九^ミ。

〔作者〕児玉南柯作・序。作者は江戸時代中・後期の漢学者で、延享三年（一七四六）十一月四日生、文政一三年（一八三〇）一月四日没。八五歳。初め、豊島氏。名、琮。字、玉卿。通称、宗吾。号、南柯（南珂）。豊島俊畠の長男。岩槻藩士児玉親繁の養子。甲府生れ。九歳で江戸に移り、宝暦六年（一七五六）武州岩槻に行き児玉氏の養子となる。同一年、岩槻藩に出仕。明和五年（一七六八）江戸詰となり、昌平黌に入り林鳳谷に師事。藩主大岡忠喜以下五代にわたつて儒を講じ、のち侍読となり、藩校遷喬館の創設に尽し、教授として子弟の教育に当る。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕文政八年（一八二五）一〇月序・刊。「岩槻」著者蔵板。

〔内容〕南柯が岩槻藩領民の童蒙教化のために著した教訓書。序文によれば、ある日の侍読の際、藩主に本書を披露したところ、後日、「此篇は好書なり。板にちりばめて領内の民に施しなば、孝道を教るひとつのたすけともなりぬべし。されども今すこしやはらげて、書をよむいとまなきものゝ耳に入りやすからしめば、いかにぞや」との仰せを頂き、その通りに改訂を施し上梓した。内容は和漢諸書に基づいて孝道を述べたもので育児書ではないが、跋文で「右は、をのれ前に随筆せし物のうちより、孝にかゝれるをのみ多り出でしるせり。かくのみにひては、父母たるものは、子に対し、いかに我まゝにてもよきといふやうに聞ゆれど、父母には父母の道あり。…父母ゆがみくねりて子にむつかしき行ひをなさしめて、孝子の名をあげさするは、父母におみては恥辱とすべし。…父たるの道をおさめ、をのれが私に勝て、短慮を押へ、疎忽の詞を子に対しても出さぬやうに心がくべし…」と親の心得を縷々述べている。

〔備考〕稀書のため全冊を収録。なお、本書の版木はさいたま市指定有形文化財として、南柯の墓所である浄安寺（岩槻区本町）に南柯の遺品の数々とともに保管されている。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文獻〕【翻刻】『徳教篇、附忠光公御公状記』（関根幸之亟注）。【影印】なし。

論婦道書（ろんふうどうしよ）

〔異称〕書名は外題による。首題ともに同じ。

〔書型〕大本一冊。天地二四一ミ。

〔作者〕落合東堤作。作者は江戸時代中・後期の漢学者で、寛延二年（一七四九）一月一日生、天保一二年（一八四一）八月一日没。九三歳。名、直養。字、季剛。号、東堤・守拙亭。羽後平鹿郡角間川の人。中山菁莪に学ぶ。秋田藩校の教授に招かれたが固辞、寛政七年（一七九五）私塾守拙亭を開いて子弟を教育し、たびたび藩主に賞せられた。また、平沢久敬に従って医を修め、稲の品種改良に当り、角間川聖人と称された。俳諧・和歌を能くした。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕文政九年（一八二六）一〇月作。文久三年（一八六三）七月書。

〔内容〕私塾「守拙亭」で子弟教育に尽力した秋田の漢学者・落合東堤が石橋貞克の求めに応じて表した女子教訓書。和漢の故事を引きながら、婦道の大義、五倫の道、従順・貞、父母の孝養などを説き、男女・貴賤によらずそれぞれの大義・大筋を知ることが重要であると強調する。また、『源氏物語』は寓言なるも「好色文」であって、これを好むときは「人道を取失ふて鳥獣の道に踏込む」ことになる、と厳しく戒め、女子の学問は『伊勢』『源氏』ではなく、『司馬温公家訓』『孝経』『論語』『列女誡』の類に学ぶべきと諭す。そして、「先入主となる」譬えのように、幼時からの正しい教育や厳しい躾が大切であると述べる。以上のほか、育児については、「幼成は天性の如く、習慣は自然の如し」や「傲ふよりなれよ」の語を引いて幼時からの良い習慣の大切さを詳述し、そのためには親が子供の模範とならねばならず、万事につけ慎むべきと教える。また、母は自らの手で子供を育て慈愛の心がより深いため、子供の過ちを父に隠してしまいがちだが、これは子供にとっては良くないため、母が眼前の愛に溺れて深い慮りがない場合には父が指導せよと注意を促すほか、「姥おばならし子」など育児における女性の甘やかしを戒める。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

妊娠心得記（にんしんこころえき）

〔異称〕書名は外題による。

〔書型〕小本一冊。天地一五八ミ。

〔作者〕松寿軒作・序。作者は江戸時代後期の大坂の篤志家で、生没年その他未詳。

〔年代〕文政一二年（一八二九）四月刊。「大阪」著者蔵板（施印）。

〔内容〕妊娠・出産に関する心を綴った小冊子で、篤志家である作者が自費出版し無料配布した施印本。まず、胎内十月の変化やその時々々の注意について述べ、胎教など妊娠中の心身の養生や心持ちを説く。産前・産後の薬方や養生のほか、荒唐無稽な迷信や呪いなども散見される。胎教では「妊娠は腹を立、亦はなき、或は氣にあたることを思ひつめ、かん（癩）癩強き人の子は、母の氣血をうけるゆへに、生るゝ児、短慮・我まゝなるべし」のようにごく一般的な心得が多いが、その中で、妊娠中の読書について「妊娠中は『女大学』^{てい}体、『智恵鑑』等の本を御よみ、つゝしみ専一也。且亦、夫も是に同。『孝経』『四書』其外、童子往来御よみあるべし」と夫婦揃って良書の読書を推奨する点が注目される。しかしながら、「母の心得あがすほどの子、生れ来て、生長の後、親泣なみくらす人、世に多し。諺に『人は氏より育もたら』といふは、生れてより後の育もたら、心得たる人多し。全く、胎内の育、本なるべし」と、惣じて母親中心の心得に終始する。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

女式目鏡草（おんなしきもくかがみぐさ）

〔異称〕 書名は題簽題「（嘉永新刻）女式目鏡草」による。首題・柱題・尾題「女式目」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二七^ミ。

〔作者〕 高井蘭山作・序。島英琳画。作者は江戸時代中・後期の戯作者で、宝暦十二年（一七六二）生、天保九年（一八三八）二月二三日没。七七歳。名、伴寛。字、思明（子明）。通称、文左衛門。号、蘭山・三遷・晒我・宝雪庵。江戸芝伊皿子組屋敷の与力。漢籍・往来物・女教訓書・字書等を童蒙向けに俗解した書を多数著す。読本作者としても曲亭馬琴の後をうけ、『新編水滸画伝』二編以下を翻訳した。＊『国書人名辞典』参照

〔年代〕 天保三年（一八三二）四月自序。嘉永五年（一八五二）二月刊。「江戸」森屋治兵衛板。

〔内容〕 『御成敗式目』の書名と形式に似せて「女性生涯の心得」を記した往来。冒頭に、貴賤の別なく全ての日本人が諸神の子孫であること、由緒正しき神々を厚く祀るべきことを述べ、以下条々の形式で、第一条「盆・歳暮その他菩提所への布施」、第二条「若い女性の宮寺参りへの戒め」、第三条「父母・舅姑への孝養」、第四条「身体を傷つけないこと」、第五条「土庶の妻の仕え方」、第六条「音曲等の稽古の心得」、第七条「不義密通の厳禁」、第八条「密通の罪」、第九条「家事の取り締まり」、第一〇条「近所付き合い」、第一条「嫉妬」、第十二条「他人の私信を見ないこと」、第十三条「密通その他悪事に関わらないこと」、第十四条「再嫁の戒め」、第十五条「嫁の選び方」、第十六条「三親・三族・九族と服忌・再縁等」、第十七条「子育て・教育」、第十八条「農工商の子弟教育」の一八カ条と、祖父・祖母と孫の関係、行儀作法、草双紙の害、日本人としての教養などを論じた後文から成る。このうち育児については、第一七条で父による男児教育と母による女児教育、第一八条で農家・商家の家業教育や礼法教育について述べる。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕 なし。〔影印〕 『江戸時代女性文庫』三九巻、『往来物分類集成』R四一、『往来物分類集成Ⅱ』R八。

仁術歛心抄（じんじゅつかんじんしょう）

〔異称〕 書名は外題・序題による。首題「歛心抄」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二六^ミ。

〔作者〕 辻慶儀作・序。明治七年（一八七四）刊『立身虎之巻』等によれば、作者は江戸時代後期の京都の豪商。宝暦十二年（一七六二）生、弘化元年（一八四四）頃没。約八三歳。名、慶儀。通称、忠郎兵衛。幼い頃から京都の富商下村家の一流井上家に奉公し、正直・正路の商いに徹して、後に京都で太物問屋を開業。子息・小者に至るまで節儉・恭慎の家風で一家一身の如く精勉して大いに成功し、巨万の富を築いた。晩年は幼童庭訓の書を多く著した（最後の著作が天保十五年（一八四四）刊『教訓いろは歌』）。

〔年代〕 天保四年（一八三三）二月作・刊。「京都」著者蔵板（施印）。

〔内容〕 『孝経』孝治章第九の「人の歛心を得て以て其の親に仕ふ（家内一同から心服され立派な主人である）と歛ばれ、親に仕える」に言う「歛心」こそが仁術の眼目と悟った作者が歛心を得る方法を論じた教訓書。著者七二歳の著述。冒頭で太郎兵衛・清兵衛・徳兵衛三人の会話から書き始め、商売の不振を不運のせいにする太郎兵衛や、神仏祈願に頼る治郎兵衛に対して、徳兵衛がある老人から伝授された歛心の術を披露するという形式で、主人・父母・子・兄弟・夫婦・舅姑・嫁・奉公人・郷党・得意方・買元職方の歛心の術を説く。育児については、「子の歛心を得る条」で育児は草木の養育と同じで、六歳から始め、「父子の間は善を改めず」と言うように「親より子へ直に強くせむる事」は斟酌が必要で、「学風の善師」に付けるのが望ましいこと、さらに、子供を善導するには「第一、奢をいましめ、先祖を祭る事を見習らはせ、家の規矩を守らせ、家業をもつばらに勤させ」るべきことなどを説く。『小学』の年代別教育論の影響を受けているが、「今の時節」にふさわしい年齢に置き換えて述べている。

〔備考〕 全冊を収録。なお、前述『立身虎之巻』は、慶儀の著作四点（『教訓いろは歌』『養生目の子算』『仁術歛心抄』『四徳配当抄（本集成九巻所収）』）をまとめて再刊したものである。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕 なし。〔影印〕 なし。

五倫訓（ごりんくん）

- 〔異称〕 書名は外題・柱題による。首題・題簽題・見返題・序題「（礼学大全）五倫訓」。跋題「（礼学五倫童蒙訓）」。
- 〔書型〕 半紙本一冊。天地二三四ミ。
- 〔作者〕 大館天涯作・序。鷗鷺昌（大郷）校・序。作者は江戸時代中・後期の故実家で、宝暦六年（一七五六）生、天保九年（一八三八）四月二三日没。八三歳。名、教美・氏貞・氏晴。通称、中務・主水・礼三・謙堂。号、天涯・明礼堂・不知全斎・好問斎。近江彦根の人。諸礼に通じた。天保（一八三〇〜四四）年中に伊予国に下り、家祖伊予守氏明の古城跡を訪れ、碑を建立した。*『国書人名辞典』参照
- 〔年代〕 天保六年十一月自序。同年十二月、鷗鷺昌序。天保七年一月神埼廉（神崎小魯・朴斎）、序。同年五月、児島信跋・刊。「京都」明礼堂（著者）蔵板。
- 〔内容〕 修身齊家の要諦として礼学（礼儀・威儀兼備の礼法）と五倫を論じた教訓書で、「礼学発端」「五倫発端」および「父子之親」「君臣之義」「夫婦之別」「長幼之序」「朋友之信」の七章から成る。卷末附録「礼学童蒙必用」は、二歳からの礼法教育と朱文公の『童蒙須知』を敷衍した教訓で、「発端」「子育」「衣服」「言語」「歩行」「掃除払拭」「素読手習」「雑事」の八章に分けて述べる。このうち「礼学童蒙必用」では挨拶（御礼）を基本に据えた育児を二歳から始めよと説く。言葉が話せない幼児なら、母親が抱きながら一緒に感謝の言葉を述べれば良い。同様に、三歳以後も日常生活における挨拶を重視し、以後の礼法教育を縷々述べ、八歳になったら「礼儀・威儀兼備の礼学を男子・女子に限らず、その親々が師となりて怠りなく教えよ。もし親々が多忙なら師を選んで教えよ。ただし、昨今流布する和礼家の諸礼儀方の故実は必要ない」と説く。このほか、本文の「父子之親」や「朋友之信」にも育児に関する記述が見える。
- 〔備考〕 全冊を収録。
小泉吉永蔵。
- 〔底本〕
- 〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『近世礼法書集成』一〇卷（「礼学童蒙必用」のみ収録）。

子供そだつる教へ草（こどもそだつるおしえぐさ）

- 〔異称〕 書名は外題による。
- 〔書型〕 半紙本一冊。天地二二九ミ。
- 〔作者〕 作者不明。
- 〔年代〕 天保十一年（一八四〇）八月刊。「？」子育て藏堂祈願所蔵（施印）板。
- 〔内容〕 巻頭に子返しする女性の図を掲げ、間引き等の子殺しの罪を戒める教訓文を付した小冊子。「夫、万物の性は天地自然の理にして、陰陽和合のたへなることにて、人の生るゝも又同じ道理なり。かならずわたくしのことにあらず」と筆を起こし、まず、人の誕生が人為ではないことを述べ、続いて、近年の悪習として貧富に関わらず子供が「身代（財産）のかせ（枷）」となるとの理由で墮胎や間引きを平気とする親の外道ぶりを批判し、その免れ難い罪を強調する。さらに、子供が身代の邪魔にならない道理を里芋・生姜の喩えによって論し、「子供が多くても其子が銘々に福分をもちて生るゝゆゑに親のかせにはならぬことなり」と説き、逆に、子返しをすればその子の怨みによって災難や損失が生ずると戒める。また、子沢山は家繁昌・子孫永続の基であり、多くの子供の中には良い子や孝行な子も出て、楽隠居の身分になる者も多いので、たとえ子供で難儀しても「天からの授かりもの」と心得て育児にあたるのが親心であると教える。子殺しは鳥獣にも劣る行為であり、もし、これまでに子返しをした経験のある者は、天理に背いた大きな罪を自覚し、水子供養を十分に行い、我が身や子孫に報いや祟りのないように朝夕祈念せよと述べて締め括る。
- 〔備考〕 全冊を収録。表紙（里芋・生姜の図）および冒頭部の子返し図は色刷り。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

主従心得草「後編」(しゅじゅうこうこえぐさ)

〔異称〕 書名は外題・首題による。題簽題・尾題「主従心得草後編(篇)」。柱題「主従心得二編」。

〔書型〕 半紙本二卷二冊(後編)。天地二二七^ミ。

〔作者〕 寿福軒真鏡作・序。作者は江戸時代後期の道学者で、生没年未詳。号、寿福軒・真鏡・安楽精舍。江戸下谷金杉の人。

〔年代〕 天保一三年(一八四二) 四月自序。同一年七月刊。「江戸」和泉屋仁三郎ほか板。

〔内容〕 上巻自序によれば、本書は「奉公人の有増^{ありぞう}」を記した教訓書で、第一八丁までは『年季奉公御仕着漸』に取材したものという。上巻には「幼少の時奉公に出るに三ツつの品ある事」以下一九章を収録し、このうち、第三七丁(二八七頁) 以下の「一切の奉公人衆遠方の東都^{えど}へ何しに來たといふ事」「八瀬大原等の乳呑子育てやうの事」「親は子の悪をしらぬ事、司馬温公家訓の事」等に育児関連の記述がある。まず、「子供の気随・我忒なるは、親が愛におぼれて子を教へざるのあやまり也」と親の心得違いを指摘し、作者が見聞きした事例を引きながら、「赤子ですら幼時からの習わしでいかようにも仕付けられるのに、五、六歳以上の子供に躰が出来ないのは親が甘いからだ」と断言する。また、育児は身分よりも下に育てるのが骨で、子供には決して奢りを教えてはならないとし、五、六歳から一二、三歳までにしつかり教育せよと教える。そのほか、子供の養生を保つ「三分の飢寒」、我が子の悪を知らぬ愚かな親、父母や師による厳格な躾や教育等について説いている。

〔備考〕 後編上巻の全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

丙午明辨(へいごめいべん)

〔異称〕 書名は外題・序題・首題による。題簽題「盡微惑論」丙午明辨」。

〔書型〕 中本一冊。天地一八一^ミ。

〔作者〕 池田義信(溪斎英泉) 作・序。作者は江戸時代後期の絵師・戯作者で、寛政三年(一七九一) 生、嘉永元年(一八四八) 七月二二日没。五八歳。初め、松本氏、のち池田氏。名、義信・茂義。通称、善次郎・里介。号、溪斎・英泉・小泉・一筆庵・国春楼・北亭・楓川市隠・千代田才一・淫乱斎・白水など。幼時、狩野白珪斎から絵を習得し、一時仕官したが、のち歌舞伎作者篠田金治に入門した。さらに浮世絵師を志して菊川英山の父英二宅に寄寓、画業に従事し、合巻・読本などの挿絵や錦絵を描き、流行絵師となる。文政一二年(一八二九) より根津で妓楼を経営。為永春水・曲亭馬琴らとも交遊を持ち、天保一三年(一八四二) 以後は文筆活動を主とした。^{*}『国書人名辞典』参照

〔年代〕 弘化二年(一八四五) 七月作。同年同月、千島竹溪序・刊。「江戸」丁子屋平兵衛板。

〔内容〕 弘化三年丙午を目前に、丙午の俗説を否定し迷信にとらわれる愚かさを説いた簡易な啓蒙書。まず、丙午生まれの男子は成人してから運勢が悪く、丙午生まれの女子は嫁いであら夫を害するという迷信があまねく流布しており、その真偽や事実を弁えずに丙午を恐れる愚かさを指摘する。また、享保一一年や天明六年の丙午に妊娠した婦人が、他人の嘲りを恥じて流子薬を服用して死去したり、誕生した我が子を殺すなど実に嘆かわしい愚行が行われたことを批判する。一方、丙午生まれの在原業平・足利尊氏や文禄一一年丙午に江戸城が築かれた事実を見ても丙午は目出度い年であるから、丙午に妊娠した女性も安心して平産するがよい、生まれ年の善悪や丙午の妄説にたぶらかされることは愚かなことである、禁忌といえども、悪日に善事をなせば吉日、吉日でも悪事をなせば悪日であり、かかる俗説に迷う者は小悪に隔てられて大善を失うことが多いので、よくよく弁え慎むべきだと戒める。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

丙午辨（ひのえうまのべん）

〔異称〕書名は外題・首題による。刷外題「（新撰教諭）丙午辨」。

〔書型〕中本一冊。天地一七二ミ。

〔作者〕松亭金水作・序。作者は江戸時代後期の読本・人情本作者で、寛政九年（一七九七）生、文久二年（一八六二）一二月二日没。六六歳。中村氏。名、保定・経年。通称、源八・源八郎。号、松亭金水・積翠道人・拙作堂・女好庵主人・木公亭。江戸生れ。初め筆耕者谷金川の門に入り、筆耕・手跡指南を業とする。為永春水の人情本を浄書するうちにその文調を自得し、人情本の執筆を始める。自己の創作のほか、他人の作の副作も行っている。号の金水は、金川と春水の一字ずつを取ったもの。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕弘化二年（一八四五）秋、雪蟻痴人序・刊。「江戸」吉田屋文三郎ほか板。

〔内容〕前項同様に、弘化三年丙午の直前に丙午の迷信を解くために書かれた簡易な啓蒙書。冒頭に「丙午の年に生まるる女子は必ず男を食らう」という諺があるが、あと一月もすればその丙午の年が迫っており、女性たちの憂いも高まってきているので、その惑いを消すために筆を執った経緯を述べ、続いて、丙午の字義や思い詰めた女性の激情や衝動に触れ、また、丙午生まれの女性でも身を慎み人に従い孝順に努めれば天の憐れみを受け、家内安全・夫婦円満になることなどを説く。丙午生まれの殆どは前年の巳年の交合の結果であり、丙午が良くないのであれば、丙午年の交合で生まれる未年の子も不吉としなければならず、丙午が全く根拠のない迷信であると断言する。さらに、大名・高家には丙午の迷信がないことや、万事慎めば災いに勝ち勤めれば貧しきに勝つ道理を教える。なお、巻末附録「庚申辨」では「庚申の夜に生まれる子は必ず盗人になる」という俗説に反駁を加えている。

〔備考〕全冊を収録。色刷り表紙、見返も多色刷り。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕

〔翻刻〕なし。【影印】なし。

微味幽玄考（びみゆうげんこう）

〔異称〕書名は外題・扉題による。本書は前後一六年余に及ぶ改稿過程で書名も巻数も大きく変化し、夥しい推敲が行われた（成立までの経緯は『日本思想史大系』中井信彦解説に詳しい）。

〔書型〕大本一冊（第三・四巻・子育部）。天地二四八ミ。

〔作者〕大原幽学作・序。作者は江戸時代後期の経世家で、寛政九年（一七九七）三月一七日生、安政五年（一八五八）三月八日没。六二歳。通称、左門。号、幽学。尾張藩士大道寺氏の出ともされる。一八歳で生家を勘当され、畿内・中国・四国を漂泊、その間に、武芸・観相・和歌・俳諧・仏教・神道などを学ぶ。信州・鎌倉・房総などを巡歴教導し、天保六年（一八三五）名主遠藤伊兵衛の依頼で長部村に至る。翌年、京阪地方に去ったが、同一三年、長部村を再訪し、以後農民の教化指導に努めた。安政四年、百日押込などの処分を受け、赦免後、自刃した。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕天保七年（嘉永五年（一八五二）頃作。明治一六年（一八八三）六月、菅谷政俊（幸左衛門）書。

〔内容〕門人の学習用に書かれた性学のテキストであり幽学の代表作。中井信彦によれば、天保七年五月作の「性学の書」を基に同年九月に書かれた『性学趣意』全三巻が前身となり、次いで『性学微味考』全五巻が編まれ、さらに天保九年頃の『性学幽玄考』（子育部）や『性理学幽玄考』全八巻の構想過程で「子育部」が整えられ、天保一一年一月以後数度の改稿を経て弘化元年末から同三年三月にかけて『微味幽玄考』全九巻構想中の巻四までの補正を終え、嘉永五年七月頃までに一通りの成稿を見たらしい。育児については、子育部で誕生から女子一三歳、男子一五歳までの詳細な発達教育論を展開している。

〔備考〕第三・四巻および「子育部」からなる一冊を全て収録。ただし『日本思想大系』所収本と比べると、底本「子育部」は、①氣質を論じた冒頭部と、②末尾の「下愚甚を育編」を欠く。

〔底本〕小泉吉永蔵。底本は菅谷政俊自筆本。政俊は幽学の高弟で、文政四年（一八二一）生、明治三五年一二月二〇日没。八二歳。天保八年、一七歳の時に幽学入門した。

〔文献〕

〔翻刻〕『日本思想大系』五二巻「二宮尊徳・大原幽学」、『日本道徳教育叢書』一卷、『子育ての書』三（抄録）。【影印】なし。

産家教草（さんかおしえぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・序題・首題・尾題ともに同じ。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二八^ミリ。

〔作者〕 阿部三省作（遺稿）。渋江太亮編・序。阿部三省は江戸時代後期の医者で、安永元年（一七七二）生、文政一三年（一八三〇）没。五九歳。山形近郊の富農の出身で、藩医に外科を学んだ。また、渋江太亮は阿部三省の門人で、羽州山形の人（生没年その他未詳）。

〔年代〕 嘉永三年（一八五〇）春、渋江太亮序・刊。「山形」剛斎蔵板。

〔内容〕 羽州山形の町医者阿部三省の遺稿を門人が編集・校訂して刊行した産科書。編者序文で、出産は「深淵に臨むが如き大厄」で、軽い場合は葉なしでも平産するが、重い場合は葉と術の双方を施さないと救い難い、そこで、長年の実地経験と先哲の諸書に基づき、産婦のために妊娠より産後の心得を婦人に読みやすい「仮名・里言葉」で綴ったと述べる。内容は全一〇項に分け、前半は「産前」「産後」の二項について経過別・症状別の対処法や心得、後半は「^{ふたご}變胎并品胎」「^{みつご}変産（難産）」「^{ふたご}変胎（奇形児）」等の異常出産と、「妊娠禁食、さんまへあしきもの」「産後禁食、さんごあしきもの」「^{ちのてしよくも}出乳汁好食」「産後七日過宜き類」など産前後の食養生と、婚礼・夫婦生活・胎教等を説いた「男女の道」までの八項を綴る。なお、本書には巻末に「順産正位図」を掲げた改訂版（『江戸時代女性文庫』所収）もある。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本産科叢書』。【影印】『江戸時代女性文庫』五七卷。

垂統秘録（すいとうひろく）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・序題・首題・柱題ともに同じ。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二八^ミリ。

〔作者〕 佐藤信淵^{のぶひろ}作・序。佐藤信昭（昇庵）・大久保融（仁斎）校。作者は江戸時代後期の経世家で、明和六年（一七六九）六月一五日生、嘉永三年（一八五〇）一月六日没。八二歳（明和四年生、八四歳とも）。本姓、藤原。名、信淵。字、元海。通称、百祐。号、椿園・松庵・融斎・万松斎。羽後雄勝郡西馬音内村生れ。自記によれば、天明初年（一七八一）父と共に奥羽・関東を遊歴したといい、江戸で宇田川玄随に従う。のち徳島藩家老集堂氏を識り徳島に赴き、また上総大豆谷村に移る。この頃、平田篤胤・吉川源十郎に入門。江戸で加納遠江守に仕え、また一時、罪を得て武州鹿手袋に退く。砲術・兵学なども学んだという。

*『国書人名辞典』参照

〔年代〕 天保四年（一八三三）頃口授。安政四年（一八五七）一〇月、佐藤信昭序。明治十一年（一八七八）六月、織田完之序。同年十一月刊（見返の記載）。「東京」織田完之板。穴山篤太郎売出。

〔内容〕 作者の口授を子の佐藤昇庵と門人の大久保仁斎が筆記し、四〇年以上を経た明治期に刊行。もと五篇ともされるが今日伝わるのは政治行政組織論の「六府篇」と教育・厚生・福祉組織論の「小学校篇」の二篇で、後者では「小学校」を核とした教育・厚生・福祉制度を提言する。すなわち、鄉村約二万石以上を目安に小学校を建て、中央官庁の三台（教化台・神祇台・太政台）から役人を配置して関連行政の要とし、近傍の村毎に教育所を設置して父兄および児童の教育（礼法・素読等）に当たらせるほか、優秀な児童の大学校への進学、学校周辺の殖産興業、さらに、小学校配下の、①「遍く万姓の困窮を^{せんきつ}贍給」する広済館、②「衆民の疾苦を救」う療病館、③「貧民の小児を養育」する慈育館、④「小児を遊ばしめ」る遊児廠、⑤「万民を教化し、善を褒し、悪を糾して、民の患苦を除く」教育所の構想を展開する。

〔備考〕 「小学校篇」の全てと冒頭部・巻末部を抄録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本思想大系』四五卷「安藤昌益・佐藤信淵」、『佐藤信淵家学全集』、『垂統秘録・混同秘策』（改造文庫）、『子育ての書』三（抄録）。【影印】なし。

農家幼童教草（のうかようどうおしえぐさ）

〔異称〕書名は首題による。外題「教草」。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二六ミ。

〔作者〕荒野鳳山作・書。作者は江戸時代後期の人で、手習師匠と思われるが、生没年その他未詳。

〔年代〕文久二年（一八六二）二月作・書。

〔内容〕農家子弟用の教訓を七力条に分けて説いた往来。「一、夫、幼童は方長（みばえ）（実生）の成木為に等し。善人と成、悪人と成も、其親々の育にこそは寄るべけれ。這は立、たてば歩の親心、当歳や、二ッや三ッに四ッも過、いつ之間にかや六ッ、七ッ、早八歳の明の春、筆取事を教ゆべし。唐土は幼童八歳にして小学に入るよし、譬、農家に生るゝ子供にも読書事を知らざれば、生涯不自由為物ぞ。親成者は心得て師匠を撰み学せよ。行儀教ゆる其次第、先、朝とく起し、機嫌よく、手水遣はせ、食事させ、髪は母親ゆふてやり、いそ／＼師匠へ行すべし…」と起筆する第一条では、八歳の春から手習いをさせることや、農家児童の読み書きの必要性から、寺子屋の登下校の心得、師匠や親・兄妹に対する態度などを説く。第二条は、寺子屋での手習いの心得。第三条は、素読では意味まで深く理解すべきことや、素読の目的が「忠孝・五常の道」に尽きることを読む。第四条は「父がしからば取成て、母は影にて教ゆべし。小児どし（同士）争、喧嘩致すなら、両方聞て顧て厳敷おしえ諭すべし…」などの育児心得。第五条は師匠の教育者としての心得。第六条は手習い嫌いの子どもへの傾向と無筆・無学のなれの果て、さらに親の教育義務に言及する。第七条は、前条に対して、親や師匠の教えをよく守る子どもへの傾向と、その将来の理想的なことを述べて結びとする。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵（作者自筆稿本）。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

産家教導辨（さんかきょうどうべん）

〔異称〕書名は外題による。序題・首題・尾題ともに同じ。

〔書型〕大本一冊。天地二五五ミ。

〔作者〕森川仁寿斎作・序。作者は江戸時代後期の会津藩の医者で、幕末に会津藩の産子養育制度に携わった。名、澄。通称、養源。号、仁寿斎。

〔年代〕文久二年（一八六二）三月序・刊。「会津（湖西）」著者蔵板（施印）。

〔内容〕会津藩医として産子養育制度に関与する作者が著し、地域の啓発のために私財を投じて施印された産科小冊子。自序で「夫、産育ノ事ハ人生ノ大本ナリ。豈忽ニス可ケンヤ」と産育の重要性や藩内の育児助成制度や「産子任役及任医」の配置による養育促進に触れつつ本書執筆の経緯を説く。本文は、第一条は懐妊中の飲食等の注意、第二条は腹帯の由来や腹帯の締め方の注意、第三条は産後に妊婦を産台に座らせる弊害、第四条は産後直後の沐浴や梳頭等の心得、第五条は墮胎の危険性と戒めの全五力条からなる。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『日本人口史之研究』二卷（高橋梵仙著）。【影印】なし。

産育和讃（さんいくわさん）

〔異称〕書名は外題による。首題・尾題「さんいく和讃」。

〔書型〕半紙本一冊。天地二三四ミ。

〔作者〕作者不明。

〔年代〕江戸後期刊。刊行者不明

〔内容〕和讃の形式で墮胎・間引きを戒め、産子養育を奨めた産育書。「そもく天地の大徳を、生といふぞときく時は、人の命をすくひなば、天地の徳に叶べし、扱また親子のしたしみは、天性なりとぞおしへける、わが子にあわれみなき人を、とら狼とそしりたり、濁りゆく世のありさまは、産子をおろして捨るあり、親子のしたしみなきのみか、罪をつみともしらぬわざ、一樹の下の雨やどり、一河の流を汲だにも、多生の縁と聞からは、我子となるのは深き縁、縁をたづねて我はらに、わが血を分てやどる子を、おろすころの無漸さよ、慈悲もなさけも義理もなし」で始まる文章で、人命を救う尊さとそれを損なう非道さ、また、親子の縁の深さを強調し、我が子を堕ろすことはかつて自らの食を減らしてでも育ててくれた親にも似ない無慈悲であり鳥獣にも劣る行為と戒める。また、人はそれぞれに果報や福徳を持って生まれてくるなど、『子供そだつる教へ草』（第一七巻所収）と同様の心得を展開し、貧しくても子供があるのは家の宝であり、この世で殺生しない者が子孫繁昌すること、非道をすれば必ず報いがあること、現世での子殺しの罪は地獄での責め苦となること、それ故、既に犯した過ちは慚愧・懺悔の思いで朝夕念仏を唱えて水子の菩提を弔うべきで、恵の厚い御仁政下の種々の養育助成に感謝し報恩せよと諭す。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕『徳川時代児童保護資料』（社会事業研究所編）、『日本人口史之研究』二卷（高橋梵仙著）。【影印】なし。

小児寿草（しょうにことぶぐさ）

〔異称〕書名は外題による。首題・序題ともに同じ。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二七ミ。

〔作者〕浅田宗伯編・序。柴田元春（橙軒）補。清川玄道（菖軒）・唐沢孝（竹崖）跋。作者は江戸時代後期く明治時代前期の医者で、文化一二年（一八一五）五月二日生、明治二七年（一八九四）三月一六日没。八〇歳。名、初め直民、のち惟常。字、識批。通称、宗伯。号、栗園。祖父東斎、父儕庵ともに儒医。信濃筑摩郡の人。高遠・京都で医を学んだ後、江戸に出て開業。慶応二年（一八六六）将軍家茂に謁し、幕府奥医師、法眼に叙せられた。維新後は東宮侍医。なお、出版人であり、本書の一部の記事を補訂した柴田元春は、東京府士族で京橋区銀座二丁目に住む小児科医。*『国書人名辞典』参照

〔年代〕明治一九年（一八八六）春作。同二〇年三月、岡田矩（滄海）跋。同年六月初刊、同年七月再刊。〔東京〕柴田元春板。

〔内容〕挿絵を多く掲げて小児養育の心得を述べた明治初年の育児書。巻頭に「第一、背を暖にすべし」などの小児養生心得を列挙した「小児養育十種之法」（柴田元春著）を掲げ、本文には毎頁絵入りで子供の成長に伴う種々の育児心得を順々に紹介する。誕生直後の産湯、赤子に厚着をさせず外気に当てさせるなど丈夫に育てる秘訣、目が見え物心が付く頃から誕生後五十・百・二百・三百日目など成長過程の各段階での育児の要点を綴る。さらに「小児よく物を食する様にならば、成丈け右の手を用ひさせる様に教ゆべし。是『礼記』内則の法なり。また、礼は食にはじまるといふ事あれば、三度の食は素より、何をたべるにも行儀よくせよと教ゆるこそ肝要なり」のように所々『礼記』の年代別教育論を引きながら、一歳から七歳までの育児や通過儀礼・遊戯等の心得を略述する。また、巻末附録（柴田元春著）には、各種小児病の症状や薬方などを説く。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕なし。【影印】なし。